青森市埋蔵文化財発掘調査報告書　第 34 集

# 葛 野 (2) 遺 跡

## 発掘調査報告書

平成 8 年度

青　森　市　教　育　委　員　会

# 序

本書は、平成8年度県営高田地区農免農道整備事業の実施に先立ち、当該計画地に所在する葛野（2）遺跡の発掘調査を実施し、その成果をまとめたものであります。

今回の調査によって、葛野〈2）遺跡は平安時代の集落跡の一部であることが確認されました。

これらの調査の成果が、今後、埋蔵文化財の保護・活用、さらには本市の歴史解明の一助となれば幸いと存じます。

最後となりましたが、ここに本書を刊行できましたことは、ひとえに関係各機関・諸氏のご指導、地元町会並びに財産区委員の皆様のご協力の賜ものによるものと深く感謝の意を表する次第であります。

平成9年3月

青森市教育委員会

教育長　池　田　　敬

# 例　　言

1. 本書は、平成８年度に実施した県営高田地区農免農道整備事業に係る葛野(2)遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査を実施した葛野(2)遺跡は、青森県遺跡台帳に遺跡番号01218番として登録されている周知の遺跡である。
3. 本書の執筆・編集は青森市教育委員会が行い、執筆者名は、依頼原稿では文頭に記し、その他は文末に記している。
4. 図版及び表番号は、原則的に「第〇図」「第〇表」としたが、依頼原稿については「図０」とした。
5. 本報告書の土層の注記については、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄 1993）に準拠した。
6. 挿図の縮尺は各図ごとに示し、各種遺構平面図の方位は磁北を示した。なお、写真図版の縮尺については、統一を図っていない。
7. 試料の同定・分析等は、次の方々に依頼した。
   ・放射性炭素による年代測定　学習院大学教授　木越　邦彦氏
   ・石器の石質鑑定　青森県教育センター指導主事　工藤　一彌氏
8. 引用・参考文献は巻末に収めた。
9. 出土遺物及び記録図面・写真関係資料は、現在、青森市教育委員会で保管している。
10. 発掘調査の実施にあたっては、調査地区地権者および金浜財産区の多くの方々にご協力をいただき、また、発掘調査並びに本報告書作成にあたっては、次の機関・諸氏にご指導・ご教示・ご協力を賜った。ここに深く感謝の意を表する次第である。（順不同・敬称略）
    青森県埋蔵文化財調査センター、市川金丸、岩田　満、上野隆博、葛西　勵、金山晃道、木村　高、小林　淳、高橋　潤、永井　治、中嶋友文、長治圭一、水田政雄

# 凡　　例

本報告書内で使用する、略称・表現方法・スクリーントーン等は以下のとおりである。

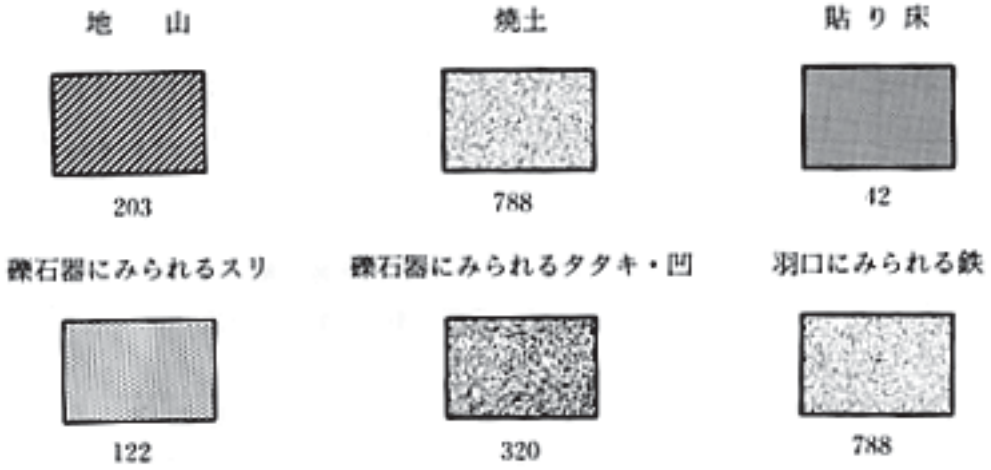
［略称］・遺構内のピット番号と深さ「第１号ピット深さ」→「Pit1（－○）」

・「ロームブロック」→「LB」

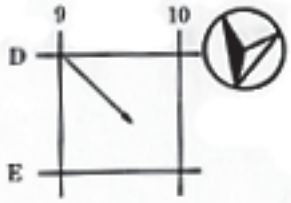
・「十和田ａ火山灰」→「To－a」

・「白頭山苫小牧火山灰」→「B－Tm」

**〔スクリーントーン〕**

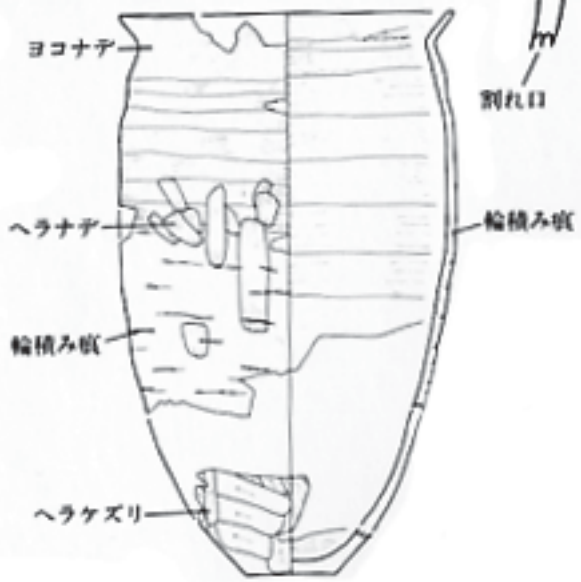



〔グリッド名〕




〔土器等断面図〕

〔土器実測図〕



# 目　次

序
例　言
凡　例
目　次
第Ⅰ章　調査の概要
第１節　調査に至る経過……1
第２節　調査要項……1
第３節　調査方法……2
第Ⅱ章　遺跡の環境
第１節　遺跡の位置と周辺の遺跡……5
第２節　遺跡付近の地形・地質……6
第３節　遺跡の層序……9
第Ⅲ章　検出遺構と出土遺物
第１節　検出遺構
1. 竪穴式住居跡……13
2. 竪穴遺構……18
3. 土　坑……18
4. 道路状遺構……23
第２節　出土遺物
1. 縄文式土器……24
2. 土師器……24
3. 須恵器……24
4. 石　器……25
5. 羽　口……26
6. 土製玉類……26
7. 鉄製紡錘車……26
8. 鉄　滓……26
第Ⅳ章　放射性炭素年代測定　……36
第Ⅴ章　まとめ　……37
引用・参考文献
写真図版

# 第Ⅰ章　調査の概要

## 第１節　調査に至る経過

東青農村整備事務所は、高田地区農免農道整備事業を計画し、それに伴い、青森市教育委員会（以下、当委員会）に対し道路建設予定地内について埋蔵文化財包蔵地の所在の有無の確認がなされた。これを受けて当委員会で所在の有無を確認したところ、当該予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地である葛野（2）遺跡が所在していることが判明した。当委員会では埋蔵文化財保護の立場から、埋蔵文化財包蔵地の現状保存のため、事業計画予定地の変更並びに見直しの要望と、もしそれが困難な場合は、記録保存のための事前の発掘調査が必要である旨を回答した。

その後、東青農村整備事務所と当委員会で、その取り扱いについて協議を行ったが、事業計画の変更は困難であるとの結論に至り、事前の発掘調査による記録保存が図られることとなった。

東青農村整備事務所より、平成8年4月12日付け東青農整第23号「埋蔵文化財の発掘調査について（依頼）」で、当委員会に発掘調査の依頼があり、これを受けて当委員会で協議を重ねた結果、文化財保護と開発事業の円滑な調整を図るため、受諾することに至り、平成8年5月9日付け青市教委社第178号において、東青農村整備事務所に受諾の旨の回答を行った。

その後、東青農村整備事務所と協議の結果、現地での調査期間を平成8年9月11日から同年11月11日までとし、調査を実施するに至った。

予算措置は年度途中の契約であるため平成8年度9月補正予算において計上した。

今年度の発掘調査区域は、遺跡範囲内を横断する道路建設予定地の一部である。残りの部分は、平成9年度以降に調査を要するものである。

なお、葛野（2）遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡台帳に登録されたのは、平成5年度のことであり、台帳には218番目に登録されている。

## 第２節　調査要項

### 1．調査目的

県営高田地区農免農道整備事業に先立ち、予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

### 2．遺跡名及び所在地

葛野（2）遺跡（くずのかっこにいせき）

青森市大字大別内字葛野146－2ほか

### 3．発掘調査期間

平成8年9月11日～同年11月11日

### 4．調査対象面積

2146㎡

**5．調査委託者**

東青農村整備事務所

**6．調査受諾者**

青森市

**7．調査担当機関**

青森市教育委員会生涯学習部社会教育課埋蔵文化財対策室

**8．調査協力機関**

青森県教育庁文化課

**9．調査体制**

| | | |
|---|---|---|
| 調査指導員 | 村　越　　潔 | 青森大学考古学研究所所長兼教授（考古学） |
| 調　査　員 | 工　藤　一　彌 | 青森県教育センター指導主事（地質学） |
| 〃 | 徳　差　義　男 | 青森市立浪打小学校教諭（考古学） |
| 調査事務局 | 青森市教育委員会 | |
| | 教　育　長 | 池　田　　敬 |
| | 生涯学習部長 | 永　井　勇　司 |
| | 社会教育課長 | 山　田　　章 |
| | 埋蔵文化財対策室長 | 遠　藤　正　夫 |
| | 室長補佐 | 福　士　　敦 |
| | 埋蔵文化財係長 | 石　岡　義　文 |
| | 主　　事 | 田　澤　淳　逸（調査担当） |
| | 〃 | 小　野　貴　之 |
| | 〃 | 木　村　淳　一（調査担当） |
| | 〃 | 児　玉　大　成（　〃　） |
| | 〃 | 沼宮内　陽一郎 |
| | 〃 | 設　楽　政　健 |

第３節　調査方法

調査区の設定にあたっては、工事用中心杭No.1とNo.2を結ぶ東西方向の直線を調査区長軸方向の基準線（Eライン）とし、これに直行する南北方向の線を短軸方向の基準線として、調査区域全体に4m×4mのグリッドを設定した。グリッド杭の表示は、No.0を起点として西へ6、7、8、の順に算用数字を付し、南へD、C、B、北へF、G、H、の順にアルファベットを付した。各グリッドの呼称はアルファベットと算用数字を組み合わせて示した（凡例）。具体的にはそのグリッドの南東隅のグ

リッド杭の表示によるものとした。なお、南北方向の基準線は、磁北より東偏14°である。

測量原点（B. M.）は、工事用に設置したB. M. －5（64.768m）を基準とし、ここから原点移動を行い、標高65.000mの原点を設置した。これをもとに、高低差およそ2m、延長120mの調査区に対処するため、さらに2カ所設定した。

工事路線内における調査対象範囲は、全面調査を原則として実施した。

粗掘りは、土層の堆積状況を観察するため、適宜セクションベルトを設けてグリッド単位で掘り進めた。

遺物の取り上げは、遺構内、遺構外出土遺物とも各層ごとに一括し、必要に応じて番号を付して実施した。

遺構の精査は、原則として竪穴式住居跡は四分法で、土坑は二分法で実施した。実測は、簡易遣り方測量と平板測量を併用して行い、縮尺は20分の1を原則とした。

写真撮影にあたっては、35㎜のモノクローム、カラーリバーサルの各フィルムを併用し、作業の進展に伴い、必要に応じて行った。

（木村　淳一）

**第１図　葛野(2)遺跡及び周辺の遺跡位置図**

# 第Ⅱ章　遺跡の環境

## 第１節　遺跡の位置と周辺の遺跡

青森市は、北側には陸奥湾に面した青森平野、南側には八甲田山から延びる火山性の台地に囲まれている。本遺跡は、その台地の一つ、市街地より南に8㎞、標高65ｍ付近に立地している（第１図）。

青森市内には平成７年度末現在で、281カ所の遺跡が登録されており、本遺跡は平成５年度の分布調査により確認された遺跡であり、縄文時代前期と平安時代との複合遺跡であることが報告されている（青森市教育委員会1994）。

本遺跡を含む青森市南部の遺跡は、青森環状野内線を境として八甲田山の火山性の台地が青森平野に接する低丘陵部分に多く分布している。本遺跡が所在する金浜地区は、近年の分布調査等によって遺跡数が多く確認された地区でもある。

本遺跡から半径2㎞以内の周辺の遺跡は、本遺跡を中心に、東側付近には、葛野(1)遺跡、山吹(4)遺跡が、西側を流れる荒川付近には山吹(1)遺跡、山吹(2)遺跡、小牧野遺跡が、さらに西側を流れる入内川付近には川瀬(1)遺跡、朝日山(7)遺跡が、北東側を流れる牛舘川付近には野木沢田遺跡、新町野遺跡、野木遺跡が位置している。

（田澤　淳逸）

**第１表　周辺の遺跡**

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 種別 | 時代 | 文献 | 遺跡番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 葛野(2) | 大別内字葛野 | 散布地 | 縄文(前)・平安 | 青森市教育委員会　1994 | 218 |
| 2 | 山吹(4) | 大別内字山吹 | 散布地 | 縄文・平安 | | 237 |
| 3 | 葛野(1) | 大別内字葛野 | 散布地 | 縄文 | | 217 |
| 4 | 野木沢田 | 野木沢田 | 散布地 | 平安 | | 216 |
| 5 | 新町野 | 新町野字菅谷 | 散布地 | 縄文(中)・平安 | | 161 |
| 6 | 野木 | 野木字山口<br>合子沢字松森 | 散布地 | 縄文・平安 | | 210 |
| 7 | 山吹(1) | 大別内字山吹 | 集落跡 | 縄文(前・中・後) | 青森市教育委員会　1991 | 186 |
| 8 | 山吹(2) | 大別内字山吹 | 散布地 | 縄文 | | 187 |
| 9 | 川瀬(1) | 高田字川瀬 | 散布地 | 平安 | | 238 |
| 10 | 朝日山(7) | 高田字朝日山 | 散布地 | 平安 | | 258 |
| 11 | 小館 | 小館字桜苅 | 館　跡 | 中世 | | 172 |
| 12 | 桜苅(2) | 小館字桜苅 | 散布地 | 縄文 | | 259 |
| 13 | 小牧野 | 野沢字小牧野 | 環状列石 | 縄文(後) | 葛西・高橋　1989<br>青森市教育委員会　1996 | 176 |

## 第２節　遺跡付近の地形・地質

青森県教育センター指導主事　工　藤　一　彌

青森平野は新生代第四紀（約170万年前～現在）に形成された海岸平野であり、東西約10㎞、南北約5㎞のほぼ直角三角形をしている。北は陸奥湾に面し、南～東は八甲田山に連なる火山性の台地、西は標高50～150ｍの比較的緩傾斜の開析が進んだ丘陵に囲まれている。火山性の台地は北～北西に流れる入内川、荒川、合子沢川、横内川、駒込川などの河川によって細分される。本遺跡はこの内、西が荒川、東は合子沢川の二つの河川に挟まれている火山性台地の北西端に位置し、平野部に対し、北西側に緩く傾斜した台地が舌状に突き出した部分の尾根の部分に相当する。

平野部と西部の丘陵地との境界には「入内断層」と呼ばれる南北方向の大きな断層が存在している。この断層は第四紀洪積世初頭（約170万年前）から活動を始め、断層の東側が最大で800ｍ以上も北に落ち込み、南東の後背地から運ばれた大量の砕屑物により非常に厚い地層が形成され、海岸平野が形成されていった。

南東側の火山性台地は、八甲田カルデラから噴出した八甲田火砕流堆積物、いわゆる「田代平溶結凝灰岩」から構成されており、八甲田火山地の北方につづき標高は40～500ｍである。八甲田牧場（標高500ｍ）、雲谷平（200ｍ）、梨の木平（200ｍ）、青森ゴルフ場（150ｍ）、月見野霊園（100ｍ）など緩傾斜の平坦面を広く残しており、傾斜は荒川右岸の青森カントリークラブゴルフ場付近で約2．5度、左岸の小牧野遺跡南方で約３度、平均で３度前後である。この台地は入内川、荒川、合子沢川、横内川、駒込川など北西～北に流れる河川によって開析されている。溶結凝灰岩が侵食に弱いためいずれの河川の谷壁も25～40度と他の開析谷に比べて著しく急傾斜となっている。八甲田火砕流堆積物は「入内断層」によってできた低地を埋め、緩やかな勾配で北西側に傾斜し、横内～駒込付近から平野に没し、平野部の試錐データによると断層の東側で1000ｍ、市の中心部では500ｍ、市東部の矢田前付近では300ｍの深さまで達している。

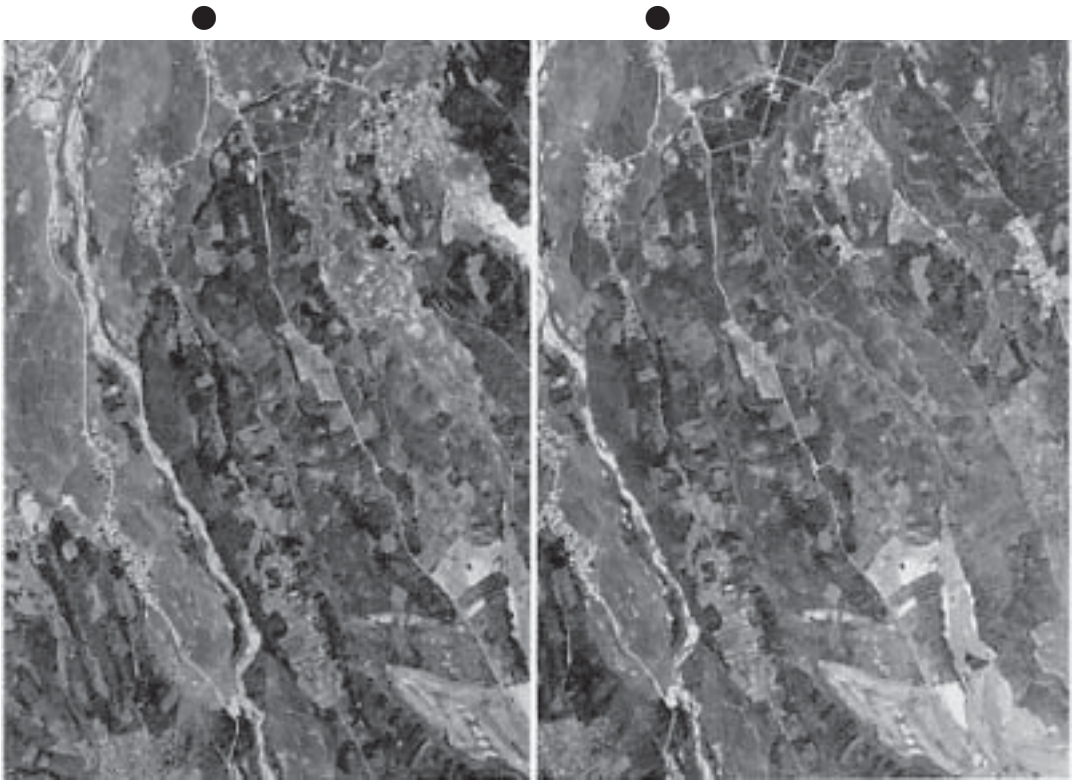
西部の丘陵地は開析がすすみ、稜線の標高は50～150ｍで緩やかに北に傾斜している。砂・砂質シルト層からなる洪積世の岡町層を基盤に砂・砂礫や八甲田火砕流堆積物などが重なり、最上位に火山灰層が堆積している。八甲田火砕流堆積物は村岡・長谷（1990）によると、大きく２つに区分され、そのうち１期のものには水底火砕流堆積物として産する場合があり、従来の鶴ヶ坂層がこれに相当するという。２期のものは従来の田代平溶結凝灰岩に相当し、陸上火砕流堆積物が主体である。村岡・長谷（1990）はＫ－Ａｒ法により八甲田第１期火砕流堆積物を約65万年前、八甲田第２期火砕流堆積物を40万年前の活動としている。

本地域の火山灰層は沢田（1976）により３層に区分され、下位から三内火山灰・大谷火山灰・月見野火山灰と呼ばれている。下位の三内火山灰は中部と最下部に浮石帯をもつ赤褐色粘土質降下火山灰で、中位の大谷火山灰は赤褐色粘土質降下火山灰と茶褐色浮石質降下火山灰よりなり、分布範囲は狭い。上位の月見野火山灰は最も広範囲に分布しており、黄褐色浮石質火山灰からなり、浮石流～火山灰流の部分も多い。

遺跡の基盤の地層は遺跡内には露出していないが、周辺の調査から八甲田火砕流堆積物と考えられる。黒色土の下位の黄褐色火山灰層は月見野火山灰と考えられ、その下位に存在する赤褐色の粘土質火山灰

は大谷火山灰と考えられる。基盤の八甲田火砕流堆積物は、塊状無層理で灰色を特徴とし、赤紫色を帯びる所も多い。径が1㎜前後の石英や斜長石を多量に含み、軽石や本質レンズは比較的少ないため、風化面では石英などの鉱物粒の多いことが特徴である。八甲田火砕流堆積物の層厚は50～100㎜に見積もられており、荒川や駒込川の中流部などのように下位の第三系は比較的浅いところにあるものと推定されるが、遺跡周辺では下湯ダム付近で確認できる。青森平野周辺では野内川上流一帯、駒込川中流、雲谷峠付近、荒川中上流には新第三紀中新世中期の地層が分布するので、本遺跡の第四系の基盤にも同様の地層が分布しているものと推定できる。上位の火山灰層は、地形の起伏によって厚さが異なり、凸部で薄く、凹部で厚くなっており、最上位の黒色土でも同様の傾向が認められる。

なお、地形区分では1948年・1969年・撮影の航空写真を使用した。



**国土地理院撮影　　1969年　　空中写真（実体視）**

**引用・参考文献**


北村信也　1972　青森県の地質（青森県）
沢田庄一郎　1976　近野遺跡発掘調査報告書（Ⅲ）（青森県教育委員会）
沢田庄一郎　1976　三内丸山（Ⅱ）遺跡発掘調査報告書（青森県教育委員会）
沢田庄一郎　1976　近野遺跡発掘調査報告書（Ⅳ）（青森県教育委員会）
池田　敬　1979　青森市の自然（青森市教育委員会）
青森県　1982　土地分類基本調査「青森西部」
青森県　1983　土地分類基本調査「青森東部」
村岡洋文・高倉伸一　1988　10万分の１八甲田地熱地域地質図・説明書（地質調査所）
村岡洋文・長谷紘和　1990　５万分の１地質図幅　黒石地域の地質（地質調査所）

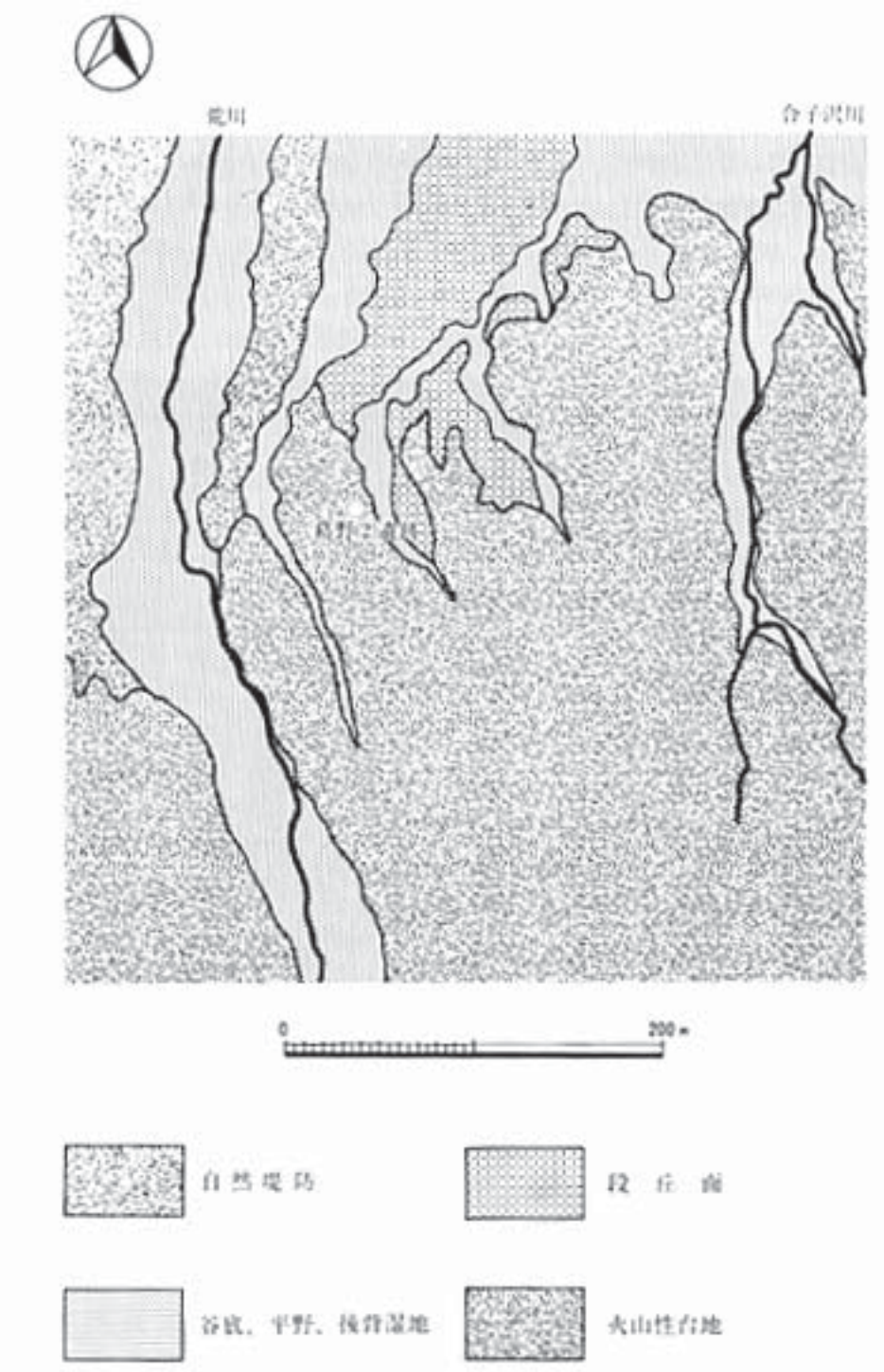



**図１　地形分類図**

## 第３節　遺跡の層序

葛野(2)遺跡は地山としたローム層上部まで30～80㎝の褐色系の土壌の堆積がみられ、畑地の部分は20～40㎝の耕作土がみられる。調査区域の基本層序は、次のとおりである。

第Ⅰ層：主に黒褐色を呈している。耕作土や盛土を一括した。

第Ⅱ層：主に黒褐色を呈している。平安時代に相当する遺物を中心に出土している。

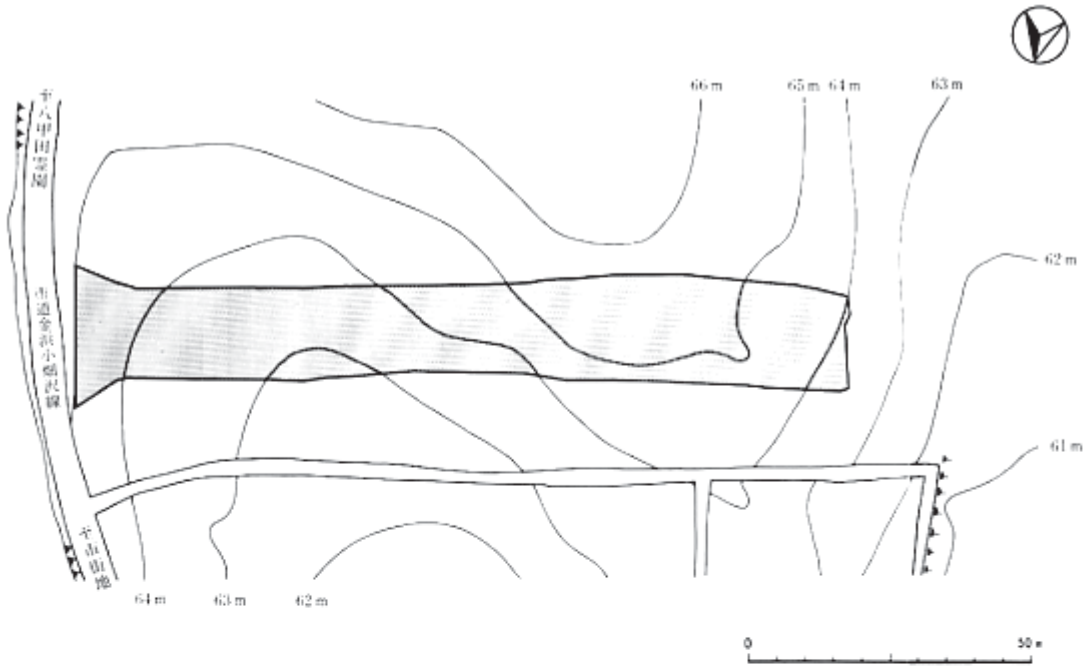
第Ⅲ層：主に暗褐色を呈している。ところどころ1㎝大の粘性ブロックがみられる。また、第Ⅱ層と第Ⅲ層の問には局部的に降下火山灰が堆積しており、その上位に粒子の細かい黄褐色のものと、下位にやや粒子の粗い灰褐色のものとがみられ、視覚的並びに触覚的に、前者は白頭山苫小牧火山灰、後者は十和田ａ火山灰と思われる。

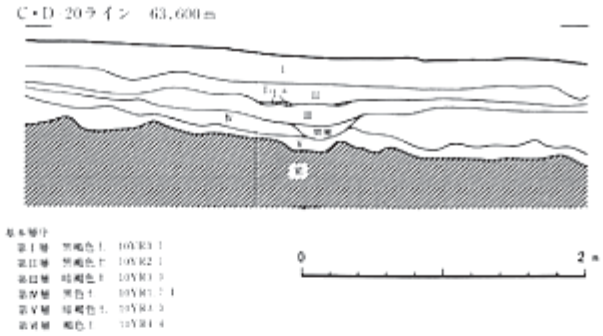
第Ⅳ層：主に黒色を呈している。縄文時代に相当する遺物を中心に出土している。

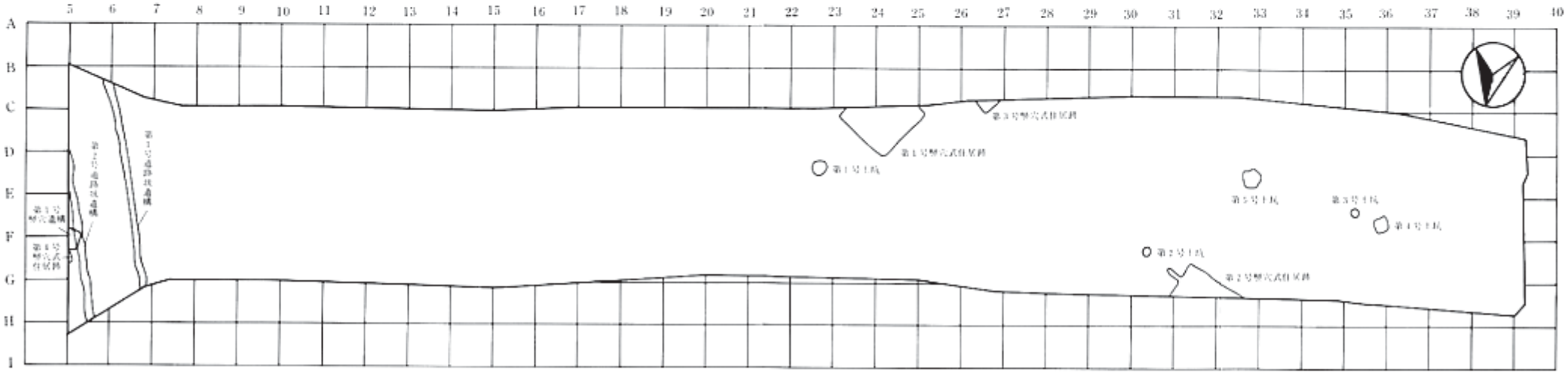
第Ⅴ層：主に暗褐色を呈している。ところどころにロームが含まれており、漸移層として捉えられる。

第Ⅵ層：主に褐色を呈している。地山ローム層。

（児玉　大成）



**第２図　地形図（左上）、グリッド配置及び遺構配置図（下）、基本層序（右上）**

# 第Ⅲ章　検出遺構と出土遺物

## 第１節　検出遺構

本調査では、竪穴式住居跡４軒、竪穴遺構１基、土坑５基、道路状遺構３条を検出した。

### １．竪穴式住居跡

第１号竪穴式住居跡（第３図）

［位　　置］ B・C－23～25グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］ なし。

［平面形・規模］ 調査区域外に続き全体形は不明である。規模は、壁の上端部で南西～北東5m50cm×南東～北西5m、下端部では南西～北東5m20cm×南東～北西4m80cmを計る。確認面から掘り方までの深さは30～50cmを計る。

［　壁　］基本層序第Ⅵ層を壁面としており、やや外側に向かって直線的に立ち上がる。壁高は25～40cmを計り、南壁、西壁が高い。

［　床　］ほぼ平坦な床面を呈しており、全面的に貼床（第２層）を検出した。この貼床を除去すると、掘り方面があらわれ、壁際には幅約50cmを計る溝が、内側には無数の穴が掘られている。この穴は、当時の掘り具として考えられる鋤痕の可能性も想定される。

［壁　　溝］ 検出部分だけでみると、南東側の一辺を除いて確認している。規模は、上部が幅10～20cm、下部が幅４～10cm、床面からの深さは約20cmを計り、腰板を支えるための柱穴であると推定されるピットを壁溝内から７基（Pit－４～10）検出した。

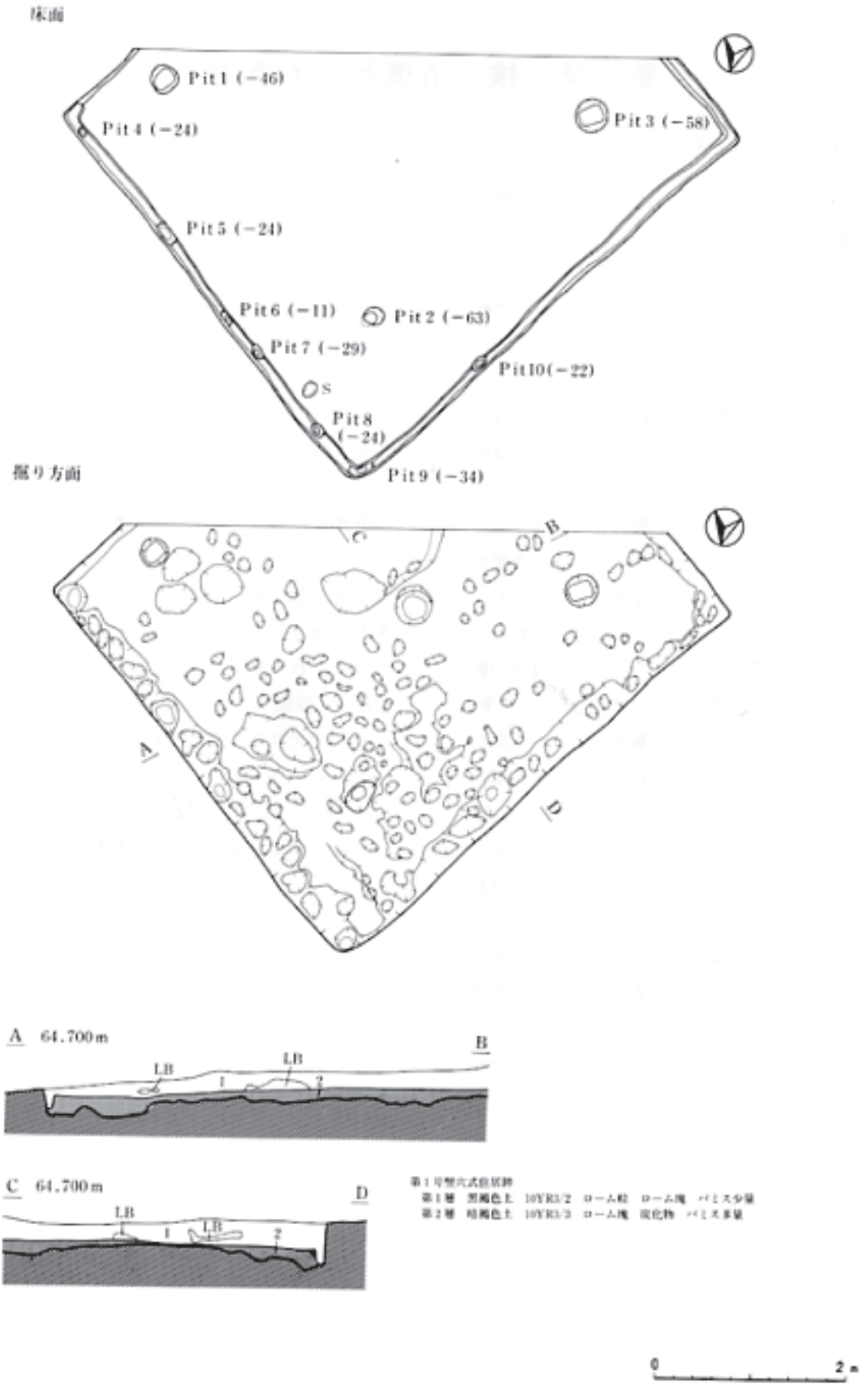
［柱　　穴］ 主柱穴とみられるものを３基（Pit－１～３）検出した。それぞれの深さは床面からの探さを示し、Pit1が46cm、Pit2が63cm、Pit3が58cmを計る。いずれも柱痕がみられず、抜き取られた可能性も想定される。

［カ　マ　ド］検出しなかった。

［堆　積　土］覆土は第１層の黒褐色土で、その中にローム粒やローム塊、パミス等が混入しており、人為的に埋め戻されていると考えられる。

［その他の付属施設］ 検出しなかった。

［出　土　遺　物］第１層から、土師器（第８図２、第10図12、13、19～21）が出土した。




**第3図　第1号竪穴式住居跡**

第２号竪穴式住居跡（第４図）

［位　　置］　F・G－30～32グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込み（基本層序第Ⅱ層）を確認した。

［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　調査区域外に続き全体形は不明である。

［　壁　］基本層序第Ⅵ層を壁面としており、やや外側に向かって直線的に立ち上がる。壁高は30～35cmを計り、南壁が高い。

［　床　］ほぼ平坦であり、特にカマド周辺が堅く締まっている。部分的に貼床（第４層）を検出し、それを除去すると、壁際に径約60～80cmを計るピットがいくつかみられる。

［壁　　溝］　検出しなかった。

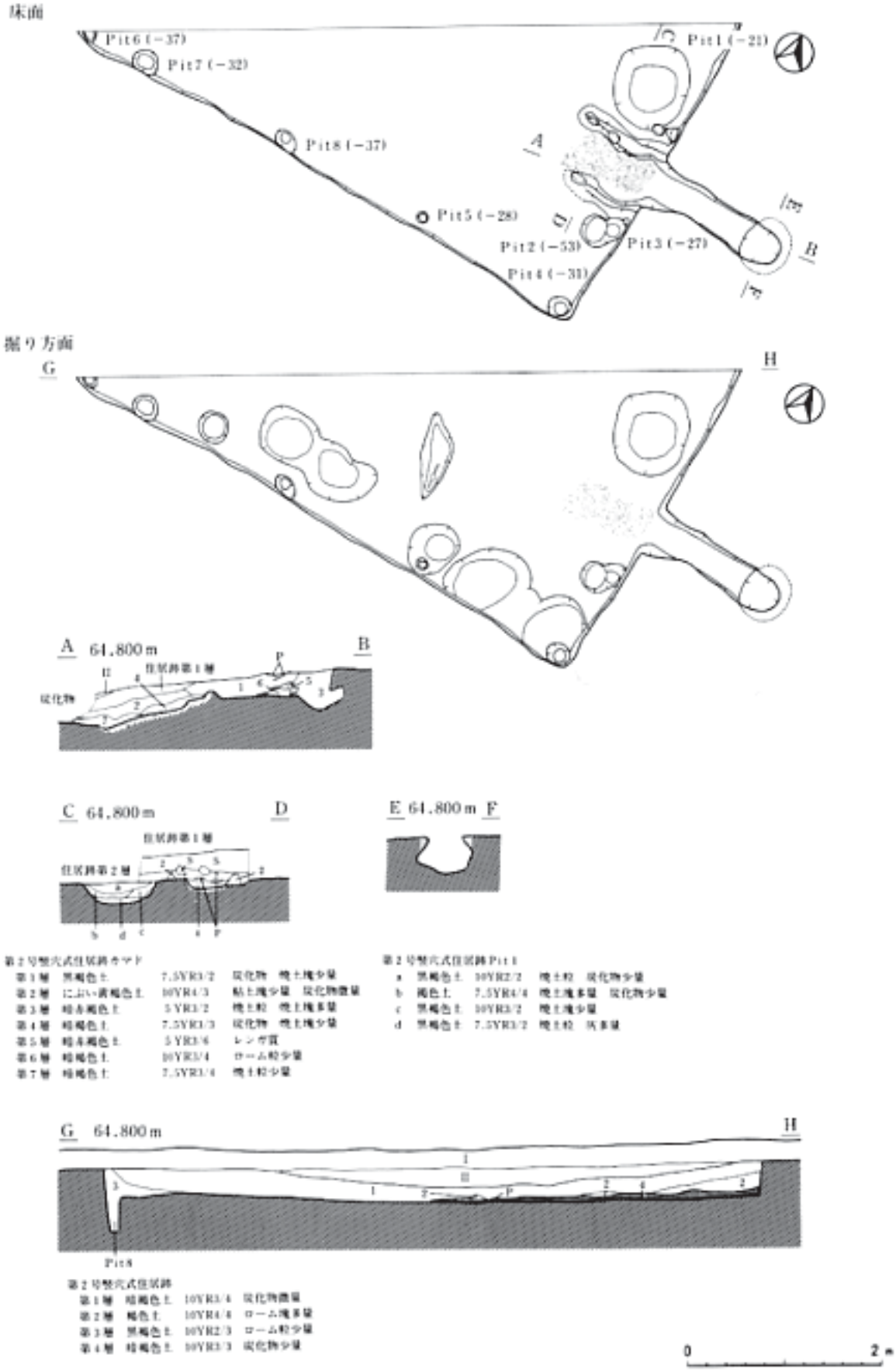
［柱　　穴］　壁際に７基（Pit－２～８）検出した。

［カ　マ　ド］東壁の中央から南よりに構築されており、残存状態は良好である。火焼面の上位層からは、天蓋部の芯材として利用されたとみられる土師器片が出土している。袖部や天蓋部は粘土で構築されており、袖部の芯材には、偏平な礫が利用されている。煙道部は半地下式であり、壁から煙出し部の先端まで1m50cmを計る。主軸方位は磁北から東偏95°である。

［堆　積　土］覆土は第１～３層で、第１層の暗褐色土は若干の炭化物を含む自然堆積土である。その上面の凹みに基本層序第Ⅱ層が堆積している。第2層の褐色土はローム塊を多量に含み、壁崩落などに影響された自然堆積土である。第３層の暗褐色土は柱穴（Pit－８）の自然堆積土である。

［その他の付属施設］　カマド袖部北寄りのピット（Pit－1）から、焼土粒や灰が他のピットと比べて多量に出土し、カマドの灰溜と考えられる。

［出　土　遺　物］第３層から敲磨器類（第15図22）、床面から土製玉類（第16図５）、鉄製紡錘車（第16図６）、カマドから土師器（第８図４、第10図24）、須恵器（第８図６、７、第11図27、28、30）、Pit－１から土師器（第10図12、13）、第４層の貼床から須恵器（第８図５、第11図31）が出土した。




**第4図　第2号竪穴式住居跡**

第３号竪穴式住居跡（第５図）

［位　　置］　B・C－26グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］　なし。

［平面形・規模］　調査区域外に続き全体形は不明である。

［　　壁　　］基本層序第Ⅴ～Ⅵ層を壁面としており、やや外側に向かって直線的に立ち上がる。壁高は30～35㎝で西壁が高い。

［　　床　　］ほぼ平坦で、全体的に貼床（第２層）を検出した。

［壁　　溝］　検出部分で二辺を確認した。規模は幅13～18㎝、床面からの深さは約20㎝を計る。

［柱　　穴］　検出しなかった。

［カ　マ　ド］検出しなかった。

［堆　積　土］覆土は第１層で、ローム塊や粘土塊を含み、人為的に埋め戻されていると考えられる。覆土の上位層は耕作のため破壊されている。

［その他の付属施設］　検出しなかった。

［出　土　遺　物］出土しなかった。

第４号竪穴式住居跡（第５図）

［位　　置］　F－５グリッドで検出した。基本層序第Ⅲ層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］　第１号竪穴遺構と重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模］　調査区域外に続き全体形は不明である。

［　　壁　　］基本層序第Ⅵ層を壁面としており、壁高は28㎝を計る。

［　　床　　］ほぼ平坦である。調査区域内では貼床を検出しなかった。

［壁　　溝］　検出しなかった。

［柱　　穴］　検出しなかった。

［カ　マ　ド］検出しなかった。

［堆　積　土］覆土は第１・２層の黒褐色土・にぶい黄褐色土で、その中にローム塊、粘土塊が多量に混入しており、人為的に埋め戻されていると考えられる。

［その他の付属施設］　検出しなかった。

［出　土　遺　物］出土しなかった。

## 2．竪穴遺構

第１号竪穴遺構（第５図）

［位　　置］ E・F－５グリッドで検出した。基本層序第Ⅲ層上面で褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］ 第4号竪穴式住居跡及び第2号道路状遺構と重複し、第4号竪穴式住居跡より新しく、第２号道路状遺構より古い。

［平面形・規模］ 調査区外に続き全体形は不明である。

［　　壁　　］基本層序第Ⅵ層を壁面としている。壁面が焼土化し、また、腰板の根元の部分が炭化した状態で出土していることから、本遺構が火災にあっているものと思われる。

［　　床　　］ほぼ平坦であり、床面から炭化物を多量に検出した。

［壁　　溝］ 検出しなかった。

［柱　　穴］ 検出しなかった。

［堆　積　土］覆土は第１～３層の褐色・暗褐色・黒色土で、その中にローム粒や炭化物が多量に混入しており、人為的に埋め戻されていると考えられる。

［その他の付属施設］ 壁北側から、袋状を呈するピットを検出した。

［出　土　遺　物］第１層から石匙（第12図1）が出土した。

## 3．土　坑

第１号土坑（第５図）

［位　　置］D－22グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で黒色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］ なし。

［形　状・規　模］平面形はほぼ円形で、断面は両端が若干丸みを帯びたナベ形を呈している。規模は、開口部で1m40cm×1m25cm、深さは70cmを計る。

［　　壁　　］基本層序第Ⅵ層を壁面としている。

［　　底　　］ 底面はほぼ平坦で、堅く締まっている。

［堆　積　土］覆土は第１～５層で、第１層の黒色土中に炭化物やローム粒、To－aと思われる降下火山灰が混入し、また、第２～５層の黄褐色・褐色・黄褐色・黒色土にローム粒、炭化物などが多量に混入しており、人為的に埋め戻されていると考えられる。

［出　土　遺　物］第１層から縄文式土器（第９図8）土師器（第８図3）が出土した。

第２号土坑（第５図）

［位　　置］ F－30グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］ なし。

［形　状・規　模］平面形はほぼ円形で、断面形は両端が若干丸みを帯びたナベ形を呈する。規模は、開口部で80cm×85cm、深さは27cmを計る。

［　　壁　　］基本層序第Ⅵ層を壁面としており、やや外側に向かって立ち上がる。

［　　底　　］底面はほぼ平坦で、堅く締まっている。

［堆　積　土］覆土は第１層の黒褐色土で、ローム粒が混入しており、人為的に埋め戻されたと考えられる。

［出　土 遺　物］底面から鉄滓（写真13－1）が1点出土した。

第3号土坑（第5図）

［位　　置］ E－35グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］ なし。

［形　状・規 模］平面形は不整円形で、断面形は浅いナベ形を呈する。規模は、開口部で70㎝×80㎝、深さは21㎝を計る。

［　　壁　　］基本層序第Ⅵ層を壁面としており、やや外側に向かって立ち上がる。

［　　底　　］底面はほぼ平坦で、堅く締まっている。

［堆　　積　　土］覆土は1～6層で主に黒褐色土から暗褐色土で、自然堆積と思われる。

［出　土 遺　物］底面から土師器（第10図22）が出土した。

第4号土坑（第5図）

［位　　置］ E－35・36グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　視］ なし。

［形　状・規　模］平面形は正方形に近い隅丸方形で、断面形は浅いナベ形を呈する。規模は、開口部で145㎝×130㎝、深さは10～20㎝を計る。

［　　壁　　］基本層序第Ⅵ層を壁面としており、外側に向かって立ち上がる。

［　　底　　］底面はほぼ平坦であり、堅く締まっている。

［堆　　積　　土］覆土は1～7層で主に暗褐色土から黒色土で、自然堆積と思われる。

［出　土 遺　物］底面から鉄滓（写真13－2・3）が2点出土した。

第5号土坑（第5図）

［位　　置］ D－32グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］ なし。

［形　状・規　模］平面形は不整円形で、断面形は、北側が急に、南側が緩やかに立ち上がる。

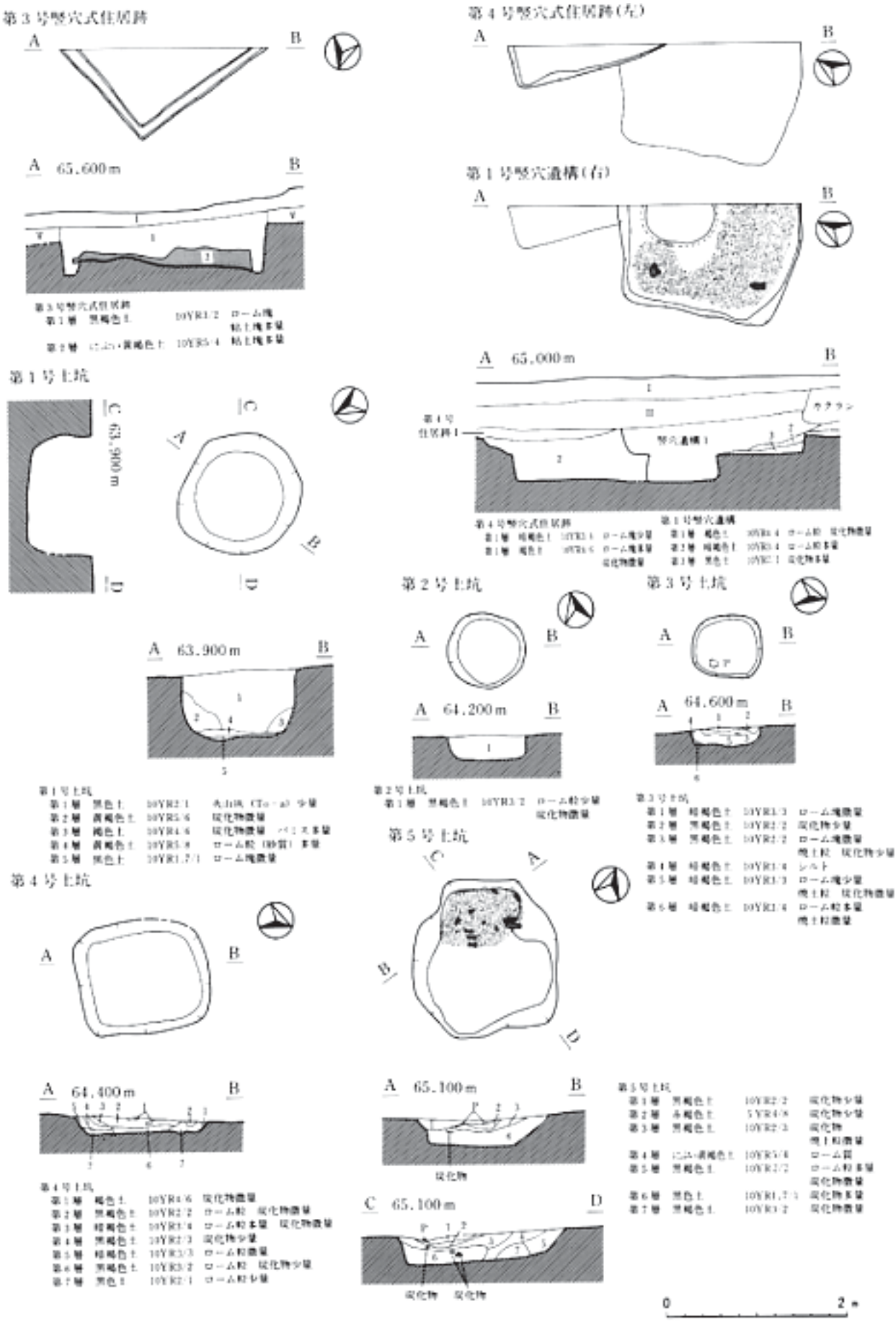
［　　壁　　］基本層序第Ⅵ層を壁面としており、外側に向かって立ち上がる。規模は、長軸が171㎝、短軸が150㎝、深さが28㎝を計る。

［　　底　　］底面はほぼ平坦であり、堅く締まっている。

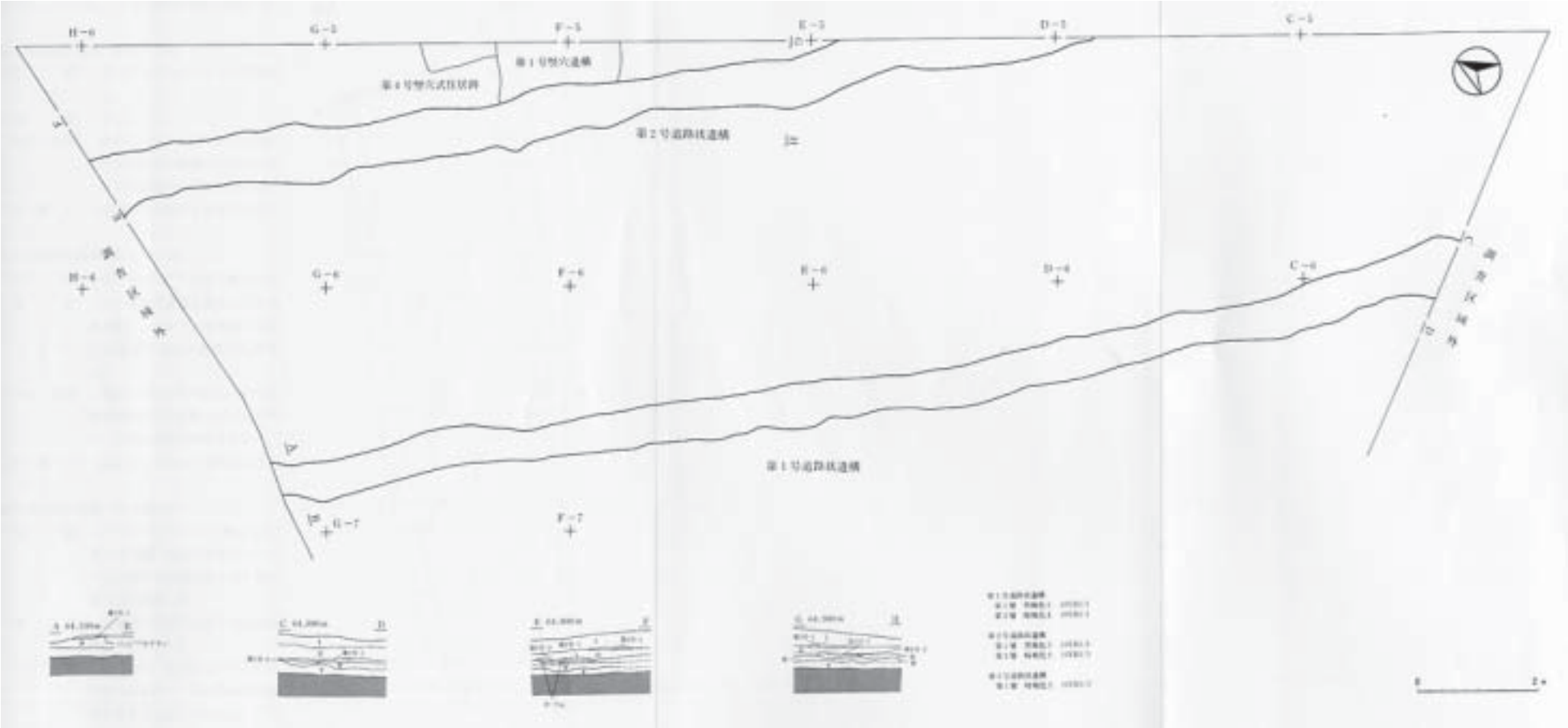
［堆　　積　　土］覆土は1～7層で、特に北側底面～第6層の黒色土から炭化材・炭化物が多量に出土した。第2層の赤褐色土は焼土化しており、崩落した天蓋部であると思われ、その中から出土した遺物は芯材として利用されたものと考えられ、窯跡としての可能性も想定される。

［出　土 遺　物］第2層から土師器（第10図17、23）、羽口（第16図1）が出土した。

（田澤　淳逸）




**第５図　第３・４号竪穴式住居跡、第１号竪穴遺構、第１～５号土坑**




**第6図　第1～3号道路状遺構**

## 4．道路状遺構

土壌が帯状に硬化した部分を数条にわたって検出した。ここでは、これを道路状遺構と呼称した。

第１号道路状遺構（第６・７図）

［位　　置］ B～G－5～6グリッドで検出した。

［重　　複］ なし。

［形　状・規　模］検出した部分は、幅40cm～70cm、調査区域内での距離が20.9mを計り、ほぼ直線的な帯状を呈する。

［堆　　積　　土］硬化した土壌が２層みられる。

第２号道路状遺構（第６・７図）

［位　　置］ C～G－5グリッドで検出した。

［重　　複］ 第１号竪穴遺構と重複し、本遺構が新しい。また、本遺構の上位には第3号道路状遺構が位置する。

［形　状・規　模］検出した部分は、幅50cm～100cm、調査区域内での距離が17.1mを計り、ほぼ直線的な帯状を呈する。

［堆　　積　　土］硬化した土壌が２層みられる。

第３号道路状遺構（第６図セクション）

［位　　置］ C～G－5グリッドで検出した。第2号道路状遺構を精査中のセクション面で基本層序第Ⅰ層と第Ⅱ層の間で確認した。

［重　　複］ 本遺構の下位には第2号道路状遺構が位置する。

［形　状・規　模］幅約60cm、調査区域内での距離が14.1mを計り、ほぼ直線的な帯状を呈するものと思われる。

［堆　　積　　土］硬化した土壌が１層みられる。

（児玉　大成）

**第７図　第１・２号道路状遺構土壌硬土計測値（kg/cm²）**

## 第２節　出土遺物

本遺跡から出土した遺物は、段ボール箱で５箱分であった。遺構内と遺構外のものとを併せて記述することとした。

**1．縄文式土器**（第８図1、第９図８～11）

本調査で出土した縄文式土器のうち、復元できたものは、１点のみで、ほかは破片で出土した。

1は、深鉢形で器形が焼成時にゆがんだもので、全体的には、底部から胴上部へと内側に傾いている。胴部には、複節RLR縄文が施され、9、10の深鉢形土器にも同じRLR縄文が施されており、いずれも、縄文時代前期の円筒下層式に比定され、遺構外から出土した。

8は、深鉢形で口縁部に隆起帯を巡らしており、胴部には複節RLR縄文が施されている。縄文時代前期の円筒下層ｂ式土器に比定されるものである。第１号土坑から出土した。

11は、深鉢形で口縁付近に位置する部位と思われる。文様は、平行沈線から曲沈線へと繋がり、縄文時代後期の十腰内Ⅰ式土器に比定されるものである。遺構外から出土した。

**2．土師器**（第８図２～４、第10図12～25）

坏と甕でほとんどが破片で出土した。

a．坏（第10図12～14）

口縁部が残存するもの（12）は、１点のみで、胴部から緩やかなカーブを描き、口縁が軽くくびれるものである。いずれも、内面に黒色処理が施されている。

底部が残存するもの（13・14）は、２点で、底面に回転糸切痕がみられる。12・13は第１号竪穴式住居跡第１層から、14は遺構外から出土した。

b．甕（第８図２～４、第10図15～25）

口縁部が外反するもの（4・17・18）、口縁部が「く」状に外反するもの（2・3）、口縁部が短く外反するもの（19）が出土した。

調整は、2では、外面は胴部から口縁部にかけて斜位のヘラケズリ、内面はヨコナデ後に縦位のヘラナデが施されている。3では、外面は底部から胴下半にかけて、横～縦位のヘラケズリが、胴中央に縦位のヘラナデが、胴上半から口縁部にかけてヨコナデあるいはロクロ整形が施されている。内面は、全体的にヨコナデが施されている。4では、外面は胴中央から口縁部にかけて縦位のヘラナデが、内面は幅広の横位のヘラナデが施されている。15・22・23の外面は縦位のヘラケズリが、内面はヨコナデが施されている。16・17・19・20の外面はヘラナデが、内面はヨコナデが施されている。また、底面に簾痕がみられるものもある（25）。2・12・13・19～21は第１号竪穴式住居跡第１層から、4・24は第２号竪穴式住居跡カマドから、15・16はそのPit1から、3は第１号土坑第１層から、22は第３号土坑底面から、17・23は第５号土坑第２層から、14・18・25は遺構外から出土した。

**3．須恵器**（第８図５～７、第11図26～36）

出土した須恵器の器種は、坏、壺、甕が出土した。

a．坏（第８図7）

１点のみの出土で、成形はロクロによるものである。策２号竪穴式住居跡カマドから出土した。

b. 壺（第8図6、第11図34～36）

外面の調整がヘラケズリを施しているもの（34・35）、成形がロクロによるもの（6・36）である。6は第2号竪穴式住居跡カマドから出土し、そのほかは遺構外から出土した。

C. 甕（第8図5、第11図26～33）

口縁が外反し、その口端に隆起帯が巡っており、成形がロクロによるもの（5）、外面にタタキ目が施されるもの（26～28、30～32）、両面にタタキ目が施されるもの（29）、外面口縁にヨコナデが施されるもの（33）。31は第2号竪穴式住居跡第4層から、27・28・30はそのカマドから、そのほかは遺構外から出土した。

（児玉　大成）

**4. 石　器**

a. 剥片石器（第12図1～6、第13図7、8）

8点出土している。定型石器は、第1号竪穴遺構から出土した石匙の欠損品（1）1点と遺構外から出土した石鏃（2）1点の計2点である。石匙は、薄手で縦型のつまみ部付近が残存する欠損品で、つまみはほぼ中央に位置している。調整は雑で、背面はほぼ全面、腹面はつまみ部付近にのみみられる。石鏃は薄手の柳葉形を呈し、中央部からやや下部に最大幅をもち、先端部がわずかに欠けている。両面を両サイドからていねいに調整し、両面ともほぼ中央部に稜をもつ。

不定型石器は6点出土しており、すべて遺構外からの出土である。3は一部皮を残したフレイクの、バルブに直交する対角の一部を機能部としている。4は縦長で薄手のフレイクの一側縁の一部に、使用痕と考えられる微細剥離がみられる。5は縦長でやや厚手のフレイクの一側縁の、稜をもつ面に連続したていねいな調整を加え刃部を作出している。6はやや厚手の一部皮を残したフレイクの一側縁の、稜をもたない面の約4分の3に連続したていねいな調整を加え刃部を作出している。7はやや厚手の一部皮を残したフレイクの一側縁の、稜をもたない面の約3分の2に調整を加え刃部を作出しているが、6と比較すると調整が雑である。8は台形を呈するやや薄手の一部皮を残したフレイクの、バルブに直交する辺の稜をもたない面に調整を加え刃部を作出しており、刃部には使用痕と思われる摩滅がみられる。

石質は8点とも珪質頁岩である。製作時期は縄文時代と考えられる。

b. 磨製石斧（第13図9、10）

2点出土している。2点とも遺構外からの出土である。9は基部付近の欠損品で、器面はていねいな研磨が施されており、破断面には再調整を試みた痕跡がみられる。石質は輝緑凝灰岩である。10は刃部の欠損品であり、摂理面から剥離させた剥片を原材としたとみられ、一部に研磨が施されている。石質は千枚岩である。製作時期はいずれも縄文時代と考えられる。

C. 礫石器（第14図11～17、第15図18～23）

13点出土している。22の1点が第2号竪穴式住居跡から出土しているほかは遺構外から出土したものである。11～22の12点は敲磨器類で、23はその他とした。11は凹石の欠損品で、偏平な円礫の中央部に回転動作によりできたとみられる深い凹みを有する。12は偏平な礫片の片面に1つの浅い凹みを有する。

13はややいびつな円礫の一面に1つの浅い凹みを有する。14は細長い礫の両面の長軸1：2の位置に、各々1つずつの浅い凹みを有する。15は偏平でややいびつな礫の両面に各々1つずつのやや深い凹みを有する。16は偏平な円礫の片面にやや深い凹みが二つ、もう片面に1つの浅い凹みを有する。17は円礫

の器面全体に敲打痕がみられ、特にスクリーントーンの部分が顕著にくぼんでいる。18は細長い礫の稜の一辺に、敲打痕が2つ並んでみられる。19は偏平な円礫の稜の約4分の3にわたって敲打痕がみられる。20は偏平を円礫の稜の約2分の1と偏平な両面に擦痕がみられる。21は滑らかな棒状の礫の先端に擦痕を有し、一部に火焼を受けた痕跡がみられる。22は滑らかな棒状の礫の偏平な腹面に擦痕がみられ、背面は黒く焼け焦げている。23は断面が六角形の柱状節理の礫で、一部に細かい擦痕がみられる。石質は安山岩が7点、石英安山岩・凝灰岩・泥岩がそれぞれ2点ずつである。第2号竪穴式住居跡から出土した22以外は、縄文時代に使用されたものと思われる。

**5．羽　口**（第16図1～4）

第5号土坑第2層（天蓋部を想定）から、一辺が平坦であるものが1点出土した。他のものはすべて遺構外から出土し、形状は、断面形がほぼ円形の円筒形であるが、いずれも欠損しているものである。
また、すべての羽口に鉄の付着がみられる。

**6．土製玉類**（第16図5）

第2号竪穴式住居跡床面から1点出土した。平面形が円形を呈し径1.8㎝、断面形が楕円形を呈し、径1.3㎝で、中央部に穿孔がみられる。孔径は0.3㎝で焼成は良好である。

**7．鉄製紡錘車**（第16図6）

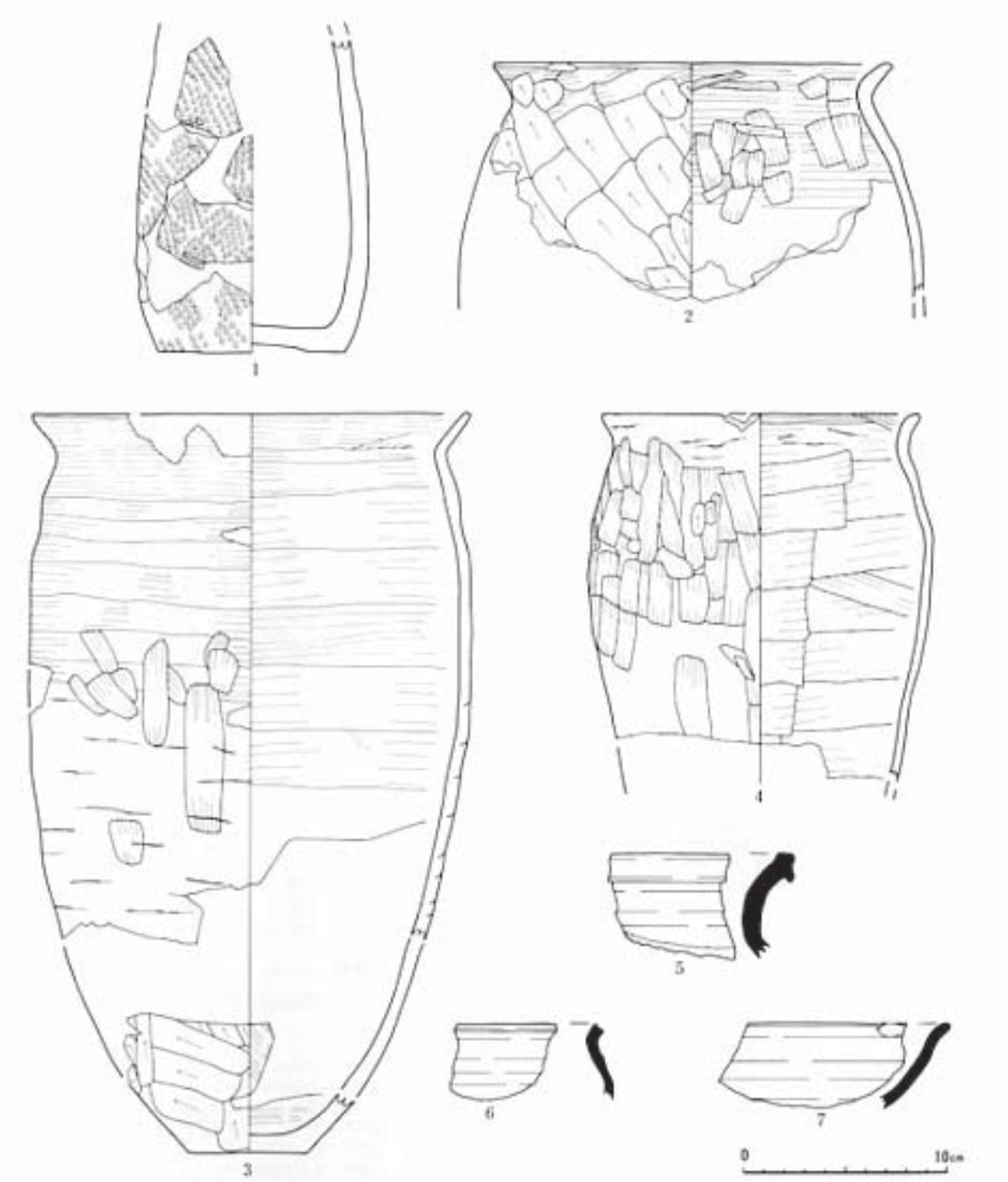
第2号竪穴式住居跡の床面から1点出土した。ほぼ完全な形を残している。軸の部分の直径は約0.3㎝、長さが約25㎝、車の部分は直径が7.5㎝を計る。

**8．鉄　滓**（写真13下）

第2号土坑底面から最大径5.3㎝、重さ144.0gを計るものが1点、第4号土坑覆土から最大径4.6㎝、重さ40.1g・最大径6.4㎝、重さ97.4gを計るものが2点出土した。

遺構外では、約270点出土しており、総重量13,870gの鉄滓が出土しており、特にC～F－33～36グリッドの地点で、13,326gと多量に出土した。鉄滓のほとんどが、細礫や砂粒を含んでいた。

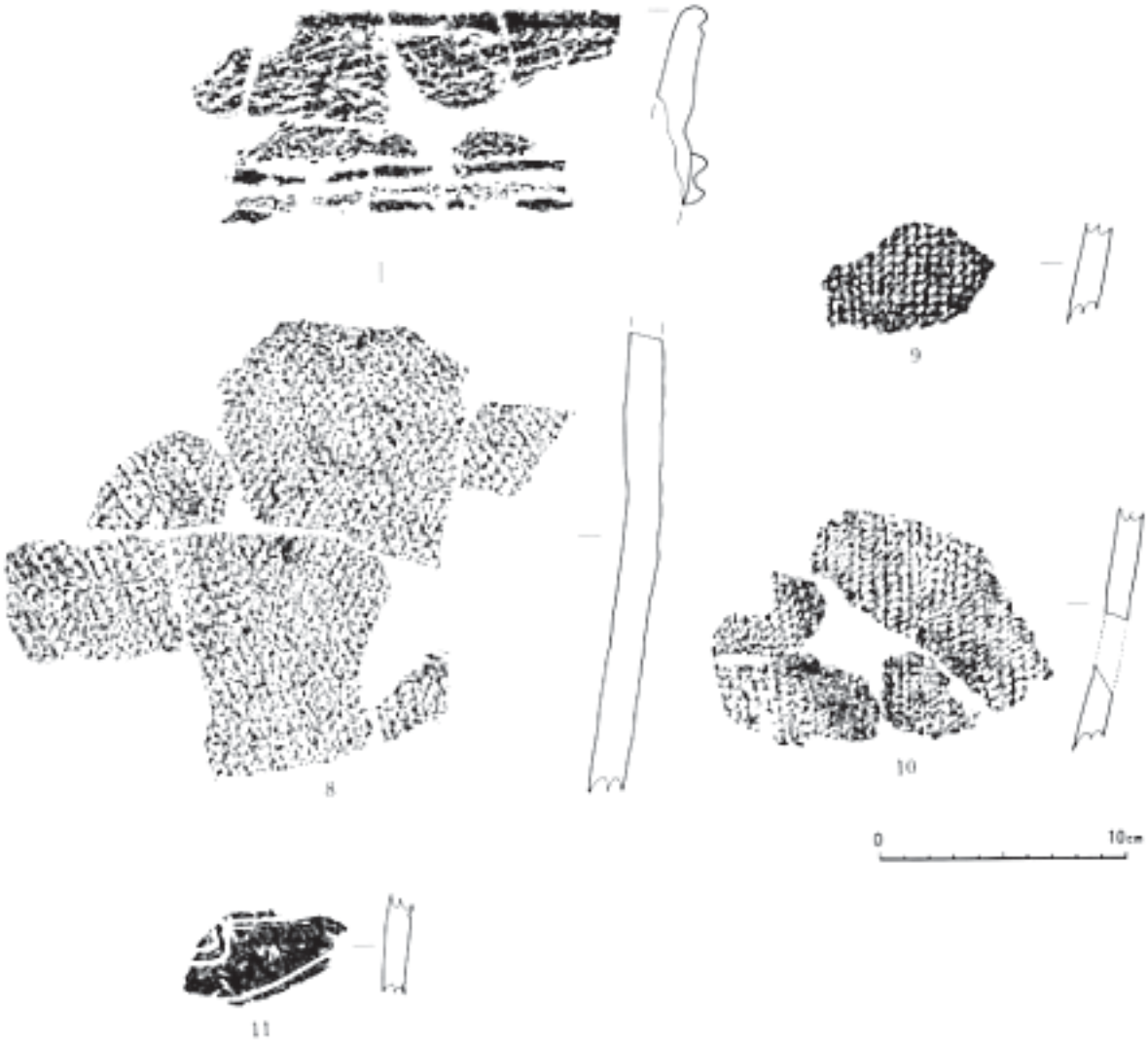
（田澤　淳逸）




**第 8 図　縄文式土器、土師器、須恵器**

**第 2 表　　縄文式土器・土師器・須恵器観察表**

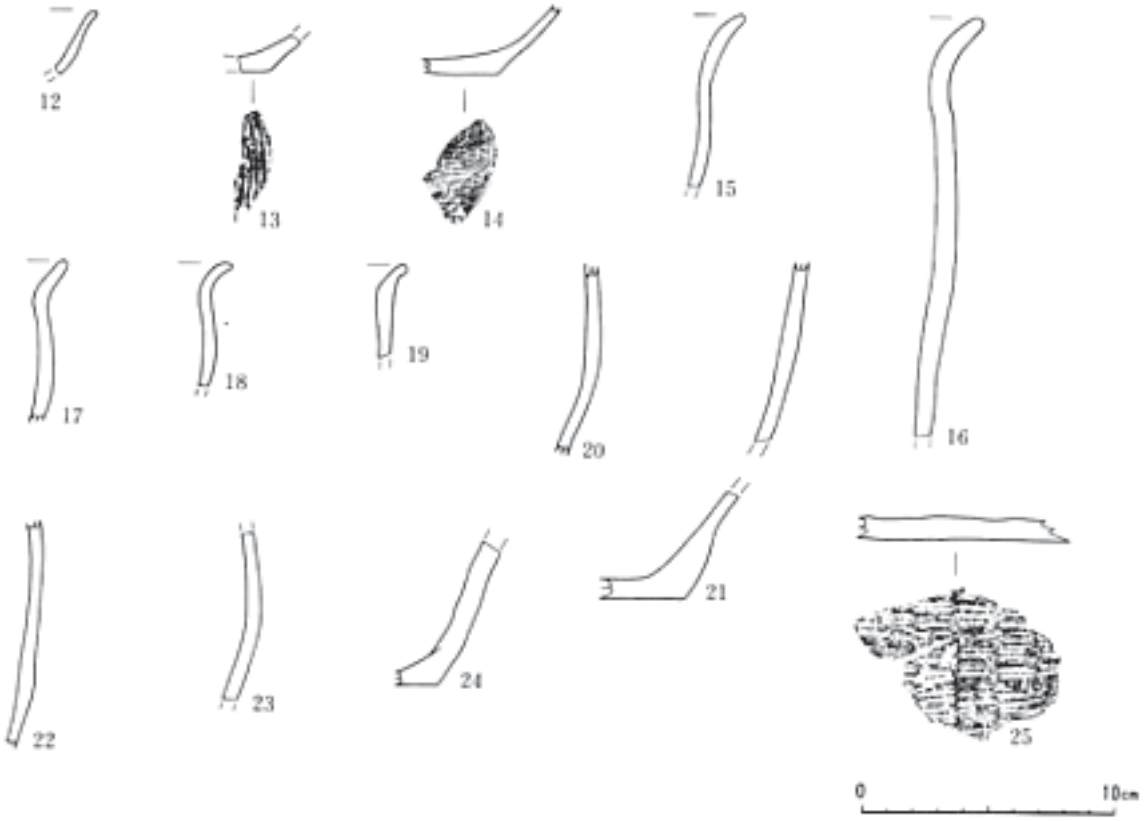
| 番号 | 種　類 | 出土遺構・地点 | 層　位 | 器　形 | 特　　徴 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 縄文式土器 | F-10 | Ⅳ | 深　鉢 | 複節RLR縄文、焼成失敗 |
| 2 | 土師器 | 第1号竪穴式住居跡 | 第1層 | 甕 | 外面（ヘラケズリ）、内面（ヨコナデ、ヘラケズリ） |
| 3 | 土師器 | 第1号土坑 | 第1層 | 甕 | 外面（ヨコナデ・ロクロ整形？、ヘラナデ、ヘラケズリ）、内面（ヨコナデ） |
| 4 | 土師器 | 第2号竪穴式住居跡 | カマド | 甕 | 外面（ヘラナデ）、内面（ヘラナデ） |
| 5 | 須恵器 | 第2号竪穴式住居跡 | 第4層 | 甕 | 外面（口縁部隆起帯）、ロクロ調整 |
| 6 | 須恵器 | 第2号竪穴式住居跡 | カマド | 壺 | ロクロ調整 |
| 7 | 須恵器 | 第2号竪穴式住居跡 | カマド | 坏 | ロクロ調整 |




**第 9 図　縄文土器、土師器**

**第 3 表　　縄文式土器観察表**

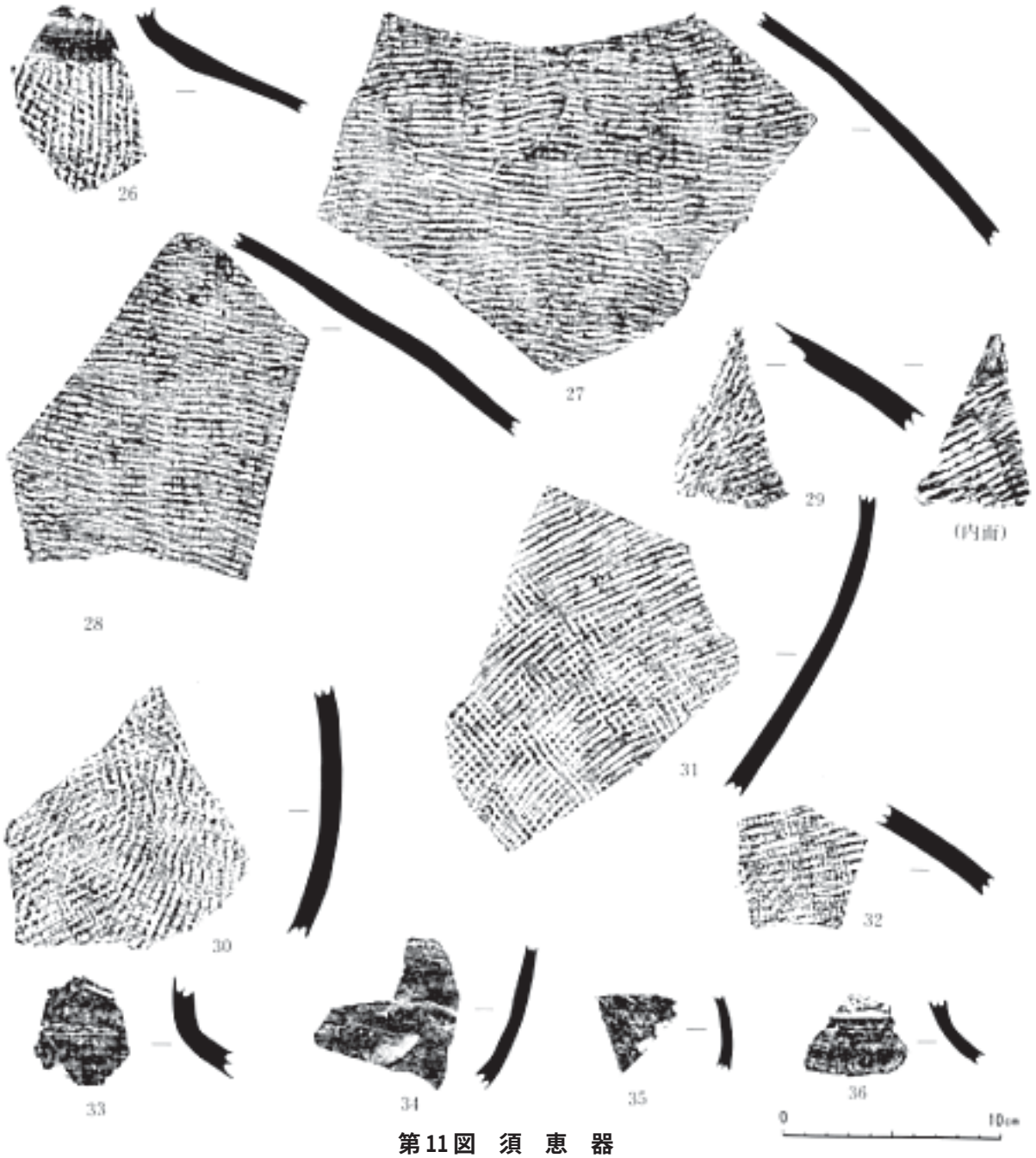
| 番号 | 種　類 | 出土遺構・地点 | 層　位 | 器　形 | 特　　徴 |
|---|---|---|---|---|---|
| 8 | 縄文式土器 | 第1号土坑 | 第1層 | 深　鉢 | 隆起帯、複節RLR縄文、胎土中植物繊維 |
| 9 | 縄文式土器 | E-10 | Ⅳ | 深　鉢 | 複節RLR縄文、胎土中植物繊維 |
| 10 | 縄文式土器 | E-9 | Ⅳ | 深　鉢 | 複節RLR縄文、胎土中植物繊維 |
| 11 | 縄文式土器 | E-20 | Ⅳ | 深　鉢 | 平行沈線、曲沈線 |




**第10図　土　師　器**

**第4表　　土師器観察表**

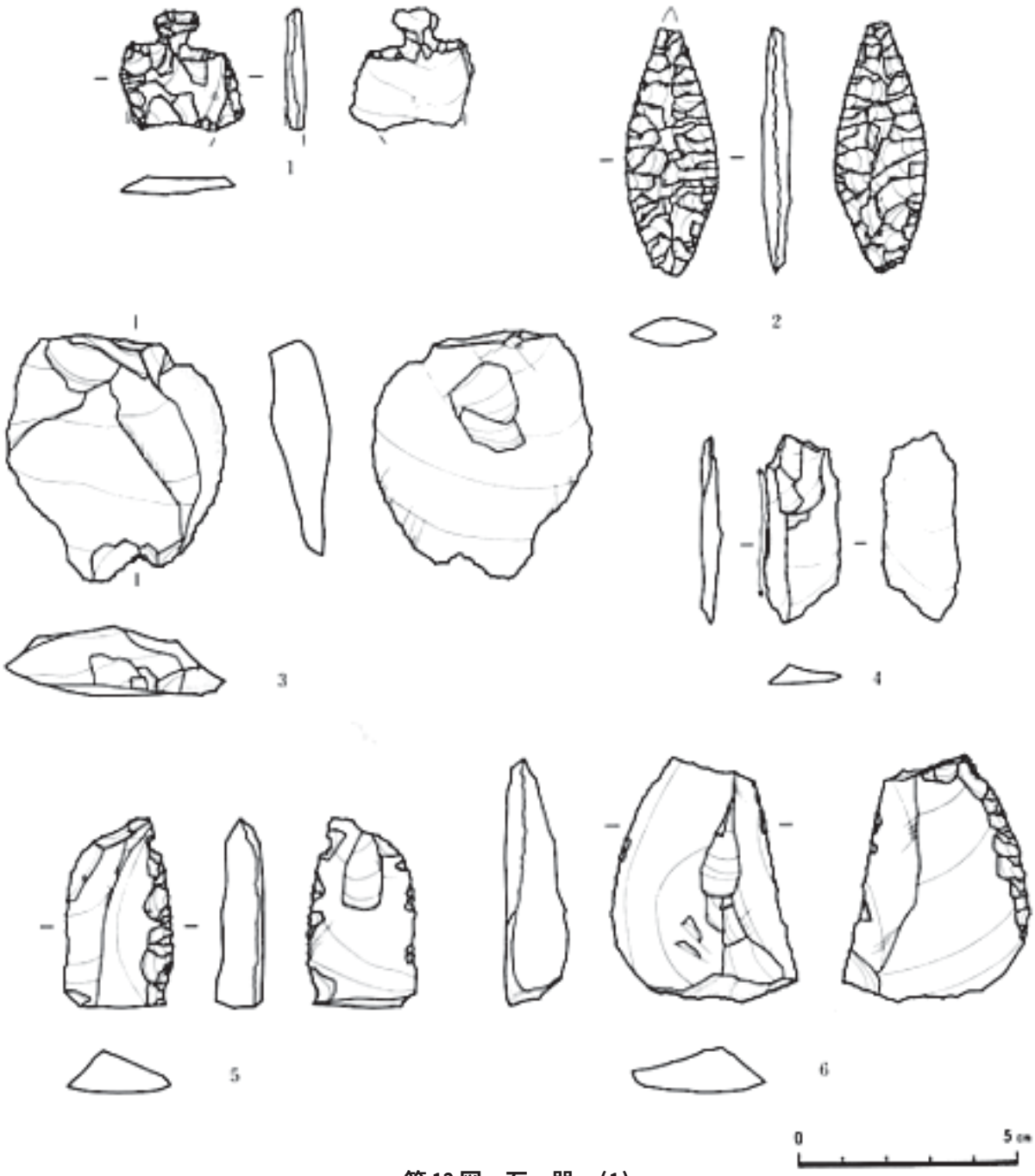
| 番号 | 種　類 | 出土遺構・地点 | 層　位 | 器　形 | 特　　徴 |
|---|---|---|---|---|---|
| 12 | 土師器 | 第1号竪穴式住居跡 | 第1層 | 坏 | ロクロ調整、内面黒色処理 |
| 13 | 土師器 | 第1号竪穴式住居跡 | 第1層 | 坏 | ロクロ調整、底面（回転糸切痕）、内面黒色処理 |
| 14 | 土師器 | E-36 | Ⅱ | 坏 | ロクロ調整、底面（回転糸切痕）、内面黒色処理 |
| 15 | 土師器 | 第2号竪穴式住居跡Pit1 | 覆　土 | 甕 | 外面（ヘラケズリ）、内面（ヨコナデ） |
| 16 | 土師器 | 第2号竪穴式住居跡Pit1 | 覆　土 | 甕 | 外面（ヘラナデ）、内面（ヘラナデ、ヨコナデ） |
| 17 | 土師器 | 第5号土坑 | 第2層 | 甕 | 外面（ヨコナデ、ヘラナデ）、内面（ヨコナデ） |
| 18 | 土師器 | E-2 | Ⅱ | 甕 | 外面（ヨコナデ）、内面（ヨコナデ） |
| 19 | 土師器 | 第1号竪穴式住居跡 | 第1層 | 甕 | 外面（ヘラナデ）、内面（ヨコナデ） |
| 20 | 土師器 | 第1号竪穴式住居跡 | 第1層 | 甕 | 外面（ヘラナデ）、内面（ヨコナデ） |
| 21 | 土師器 | 第1号竪穴式住居跡 | 第1層 | 甕 | 外面（ヘラナデ、ヨコナデ）、内面（ヘラナデ） |
| 22 | 土師器 | 第3号土坑 | 底　面 | 甕 | 外面（ヘラケズリ）、内面（ヨコナデ） |
| 23 | 土師器 | 第5号土坑 | 第2層 | 甕 | 外面（ヘラケズリ）、内面（ヨコナデ） |
| 24 | 土師器 | 第2号竪穴式住居跡 | カマド | 甕 | 外面（ヘラケズリ）、内面（ヨコナデ） |
| 25 | 土師器 | F-28 | Ⅰ | 底　部 | 底面（簾痕） |




**第11図　須　恵　器**

**第5表　　須恵器観察表**

| 番号 | 種　類 | 出土遺構・地点 | 層　位 | 器　形 | 特　　徴 |
|---|---|---|---|---|---|
| 26 | 須恵器 | C-22 | Ⅱ | 甕 | 外面（タタキ目）、内面（当て具痕） |
| 27 | 須恵器 | 第2号竪穴式住居跡 | カマド | 甕 | 外面（タタキ目）、内面（当て具痕） |
| 28 | 須恵器 | 第2号竪穴式住居跡 | カマド | 甕 | 外面（タタキ目）、内面（当て具痕） |
| 29 | 須恵器 | D-21 | Ⅱ | 甕 | 外面（タタキ目）、内面（タタキ目） |
| 30 | 須恵器 | 第2号竪穴式住居跡 | カマド | 甕 | 外面（タタキ目）、内面（ヘラケズリ） |
| 31 | 須恵器 | 第2号竪穴式住居跡 | 第4層 | 甕 | 外面（タタキ目）、内面（当て具痕） |
| 32 | 須恵器 | E-15 | Ⅱ | 甕 | 外面（タタキ目） |
| 33 | 須恵器 | E-33 | Ⅰ | 甕 | 外面（ヨコナデ） |
| 34 | 須恵器 | D-26 | Ⅰ | 壺 | 外面（ヘラケズリ）、内面（ヨコナデ） |
| 35 | 須恵器 | D-35 | Ⅱ | 壺 | 外面（ヘラケズリ）、内面（ヨコナデ） |
| 36 | 須恵器 | E-30・31 | Ⅰ | 壺 | ロクロ調整 |




**第12図　石　器　(1)**

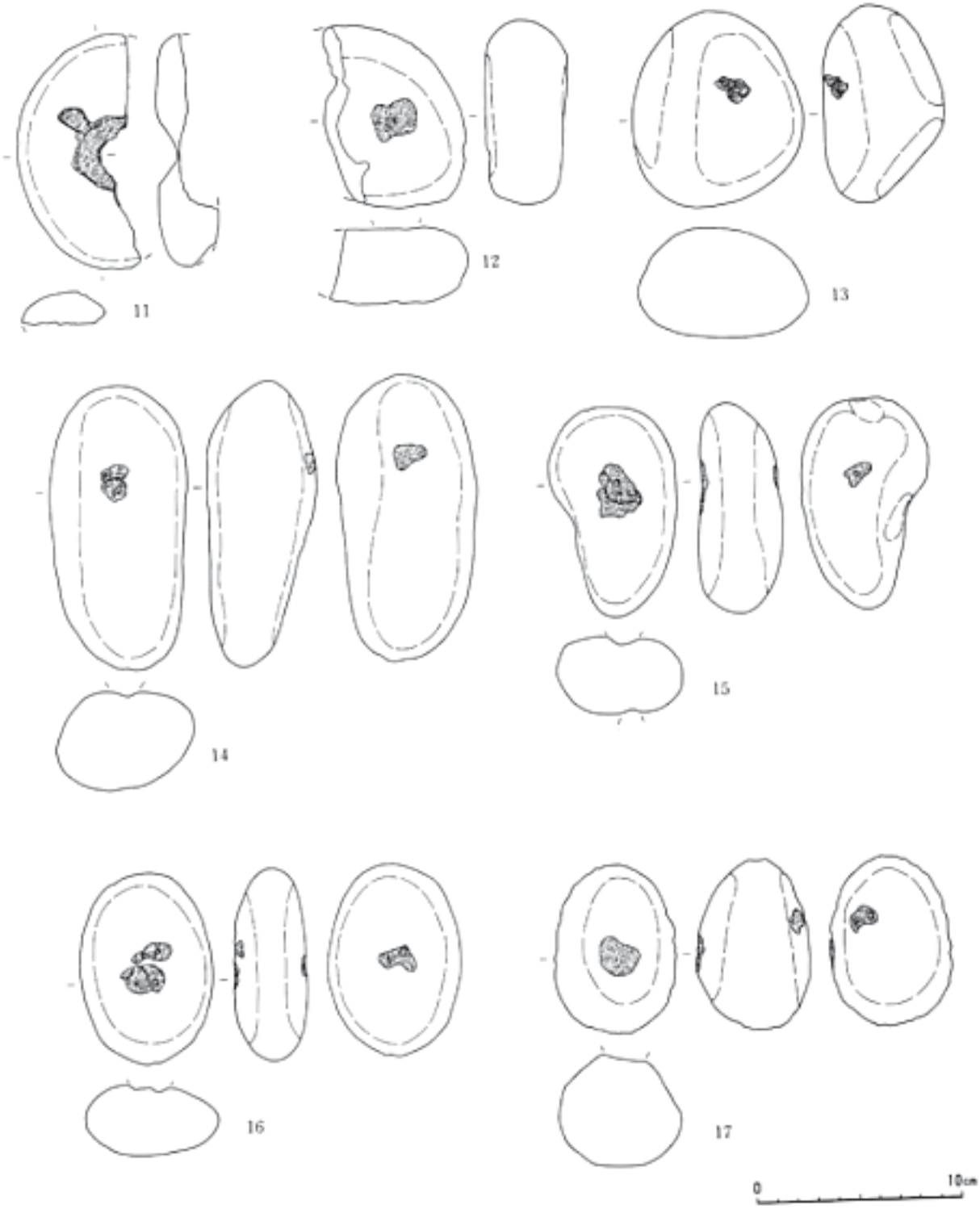
**第6表　　石器計測表(1)**

| 番号 | 種　類 | 出土遺構・地点 | 層　位 | 最　大　計　測　値 | | | | 石　質 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重さ(g) | | |
| 1 | 石匙 | 第1号竪穴遺構 | 第1層 | 24.0 | 26.0 | 4.0 | 3.2 | 珪質頁岩 | 縦型 |
| 2 | 石匙 | E-22 | Ⅳ | 55.0 | 21.0 | 6.0 | 6.8 | 珪質頁岩 | 柳葉形（尖基） |
| 3 | スクレイパー | E-21 | Ⅳ | 56.0 | 50.0 | 15.0 | 4.1 | 珪質頁岩 | |
| 4 | Uフレイク | F-9 | Ⅰ | 43.0 | 16.0 | 4.0 | 2.6 | 珪質頁岩 | |
| 5 | スクレイパー | D-12 | Ⅳ | 44.0 | 23.0 | 9.0 | 10.5 | 珪質頁岩 | |
| 6 | スクレイパー | C-6 | Ⅳ | 51.0 | 38.0 | 14.0 | 31.9 | 珪質頁岩 | |

**第13図　石　器　(2)**

**第7表　　石器計測表(2)**

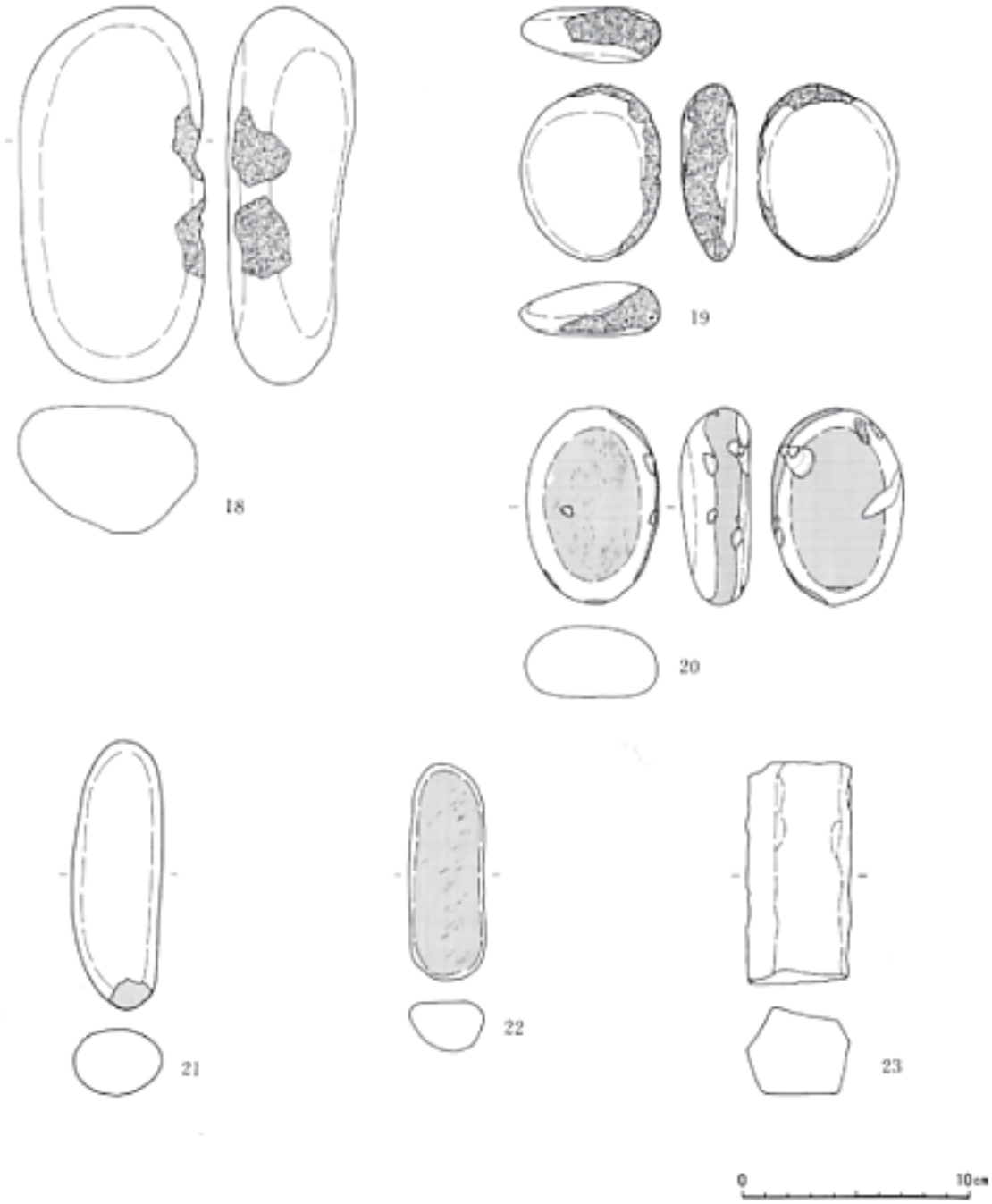
| 番号 | 種　類 | 出土遺構・地点 | 層　位 | 最　大　計　測　値 | | | | 石　質 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重さ(g) | | |
| 7 | スクレイパー | E-26 | Ⅰ | 59.0 | 39.0 | 13.0 | 33.4 | 珪質頁岩 | |
| 8 | スクレイパー | F-8 | Ⅳ | 38.0 | 53.0 | 9.0 | 21.9 | 珪質頁岩 | |
| 9 | 磨製石斧 | D-7 | Ⅳ | 43.0 | 42.0 | 14.0 | 41.9 | 輝緑凝灰岩 | |
| 10 | 磨製石斧 | D-18 | Ⅰ | 54.0 | 38.0 | 7.0 | 17.0 | 千枚岩 | |




**第14図　石　器　(3)**

**第8表　　石器計測表(3)**

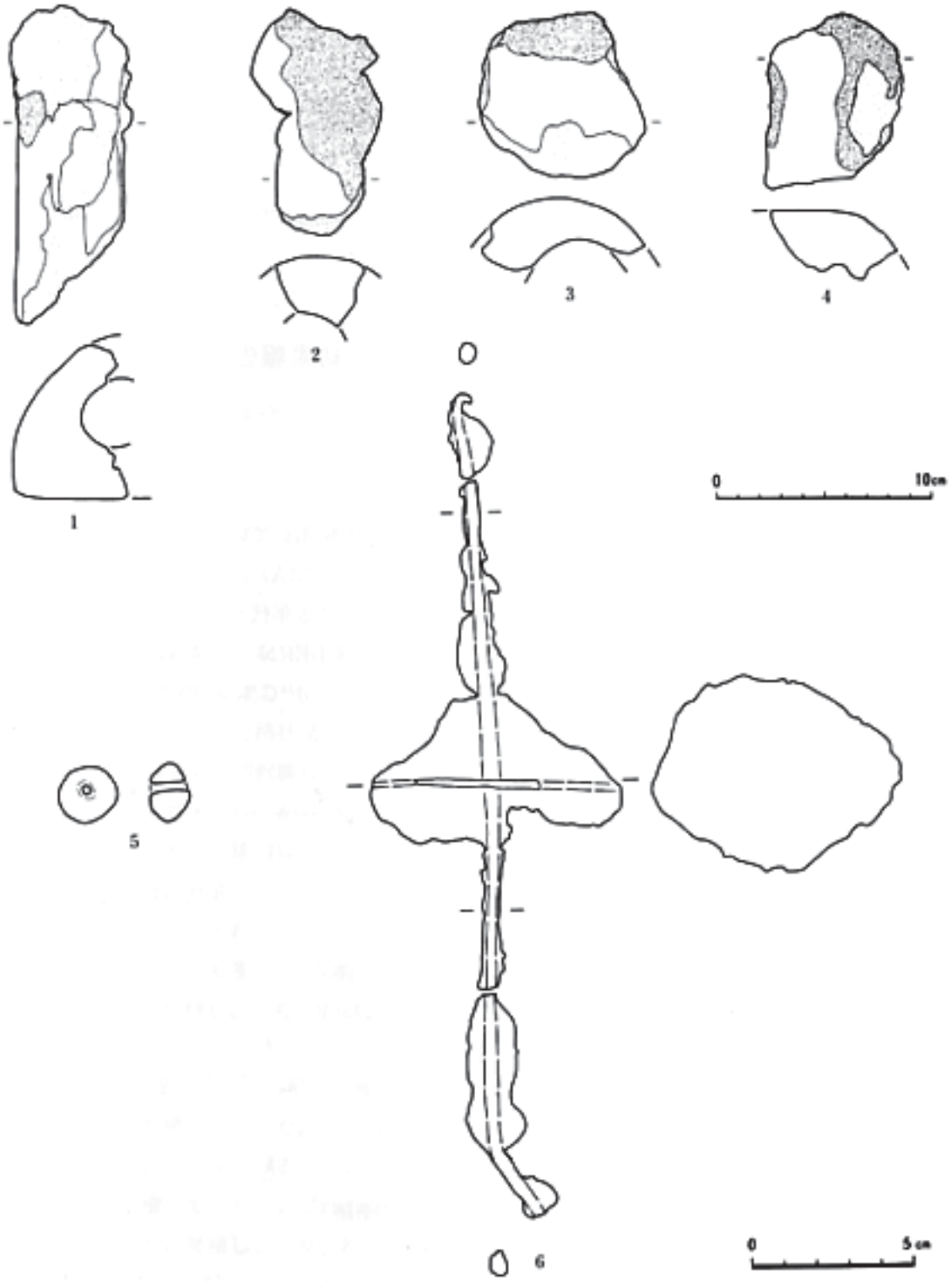
| 番号 | 種　類 | 出土遺構・地点 | 層　位 | 最　大　計　測　値 | | | | 石　質 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重さ(g) | | |
| 11 | 敲磨器類 | D-31 | I | 116.0 | 41.0 | 29.0 | 128.9 | 凝灰岩 | |
| 12 | 敲磨器類 | D-19 | IV | 92.0 | 64.0 | 41.0 | 392.5 | 安山岩 | |
| 13 | 敲磨器類 | D-21 | I | 97.0 | 83.0 | 57.0 | 660.0 | 安山岩 | |
| 14 | 敲磨器類 | F-34 | I | 140.0 | 67.0 | 50.0 | 758.0 | 安山岩 | |
| 15 | 敲磨器類 | C-24 | I | 112.0 | 62.0 | 39.0 | 359.5 | 安山岩 | |
| 16 | 敲磨器類 | C-6 | III | 93.0 | 67.0 | 34.0 | 296.9 | 石英安山岩 | |
| 17 | 敲磨器類 | D-10 | IV | 83.0 | 57.0 | 54.0 | 292.8 | 安山岩 | |




**第15図　石　器　(4)**

**第9表　　石器計測表(4)**

| 番号 | 種　類 | 出土遺構・地点 | 層　位 | 最　大　計　測　値 | | | | 石　質 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重さ(g) | | |
| 18 | 敲磨器類 | D-31 | I | 168.0 | 79.0 | 57.0 | 1150.0 | 安山岩 | |
| 19 | 敲磨器類 | D-7 | IV | 78.0 | 61.0 | 24.0 | 131.9 | 凝灰岩 | |
| 20 | 敲磨器類 | E-12 | IV | 87.0 | 58.0 | 31.0 | 173.1 | 泥　岩 | |
| 21 | 敲磨器類 | E-12 | IV | 119.0 | 39.0 | 28.0 | 184.0 | 安山岩 | |
| 22 | 敲磨器類 | 第2号竪穴式住居跡 | 第3層 | 96.0 | 33.0 | 24.0 | 78.9 | 泥　岩 | |
| 23 | その他の石器 | D-10 | IV | 95.0 | 44.0 | 37.0 | 295.0 | 石英安山岩 | |




**第 16 図　羽口、土製玉類、紡錘車**

**第 10 表　　羽口・土製玉類・鉄製紡錘車**

| 番号 | 種　類 | 出土遺構・地点 | 層　位 | 特　　徴 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 羽　口 | 第5号土坑 | 第2層 | 一辺が平坦、長さ(14.8)、幅(7.6)、厚さ(3.0)、重さ(338.2) |
| 2 | 羽　口 | E-36 | Ⅱ | 円筒形、鉄付着、長さ(10.1)、幅(6.4)、厚さ(3.1)、重さ(140.3) |
| 3 | 羽　口 | C-34 | Ⅱ | 円筒形、鉄付着、長さ(8.0)、幅(8.1)、厚さ(2.6)、重さ(150.4) |
| 4 | 羽　口 | E-36 | Ⅱ | 円筒形、鉄付着、長さ(7.6)、幅(5.9)、厚さ(3.1)、重さ(150.8) |
| 5 | 土製玉類 | 第2号竪穴式住居跡 | 床　面 | 長さ1.8、幅1.7、厚さ1.3、孔径0.3、重さ3.4 |
| 6 | 鉄製紡錘車 | 第2号竪穴式住居跡 | 床　面 | 長さ約25.0、車間の径約0.3、車の径約7.5、重さ139.9 |

# 第Ⅳ章　放射性炭素年代測定

葛野(2)遺跡で出土した炭化物について、放射性炭素年代測定を実施した。その結果は下記のとおりであった。

## 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

学習院大学教授　木越　邦彦

年代値の算出には$^{14}C$の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ線の標準偏差σに基づいて算出した年数で、標準偏差（ONE　SIGMA）に相当する年代です。また試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは、3σに相当する年代を下限の年代値（B. P.）として表示してあります。また試料のβ線計数率と現在の標準炭素（MODERN　STANDARD　CARBON）についての計数率との差が2σ以下のときには、Modernと表示し、σ$^{14}C$%を付記してあります。

記

| Code　No. | 試料 | 年代（1950年よりの年数） |
|---|---|---|
| Gak-19530 | 木炭　from　青森県青森市葛野82)遺跡<br>No.1　（第2号竪穴式住居跡床面） | -1210　±　80<br>A.D.　740 |
| Gak-19531 | 木炭　from　青森県青森市葛野82)遺跡<br>No.2　（第1号竪穴遺構床直） | -1590　±　100<br>A.D.　360 |
| Gak-19532 | 木炭　from　青森県青森市葛野82)遺跡<br>No.3　（第5号土坑底面） | -　660　±　90<br>A.D.　1290 |
| Gak-19533 | 木炭　from　青森県青森市葛野82)遺跡<br>No.4　（第1号土坑第1層） | -1440　±　90<br>A.D.　510 |

# 第Ⅴ章　ま　と　め

葛野（2）遺跡は、青森市大字大別内字葛野に所在する遺跡で、八甲田山から延びる火山性の台地の北西端、標高65m付近に位置している。

調査対象面積は、2,146㎡で、検出した遺構は竪穴式住居跡4軒、竪穴遺構1基、土坑5基、道路状遺構3条である。

出土した遺物は、縄文式土器、土師器、須恵器、石器、羽口、土製玉類、鉄製紡錘車、鉄滓である。

検出した遺構や出土した遺物の時期は、竪穴式住居跡、竪穴遺構、土坑、第1号・第2号道路状遺構や、土師器、須恵器、羽口等は平安時代に、第3号道路状遺構は平安時代以降に、土器や石器などは、縄文時代に帰属させることができる。

今回の調査で、特筆すべきことに道路状遺構があげられる。このことについて若干の考察を述べ、まとめとする。

ここでの「道路状遺構」とは、例えば住居跡の床面が生活での踏み固めによって硬化するのと同様に、生活の道としての踏み固めによって「土壌が帯状に硬化したもの」と考えられるものがそうである

本調査で検出した3条の道路状遺構の走行方向は、いずれもはぼN－400°－Wである。ほぼN－30°－Wを計る現在道の市道金浜小畑沢線は、第1号道路状遺構（以下、1号）から約6m、第2号、第3号道路状遺構（以下、2号・3号）から約1mを計る場所に位置し、各道路状遺構とは概ね平行している。

道路状遺構の土層断面の観察は、1号では調査区北端部と南端部、第2・3号では、北端部と中央部の4カ所で実施した。

第1号の北端部では、黒褐色土（第1層）がややレンズ状に基本層序第Ⅳ層上位に堆積し、硬化した土が頁状に剥離することも多い。南端部では北端郡と異なり硬化土壌は2層に分かれ、うち暗褐色土（第2層）がレンズ状に堆積し、さらにその上位には、黒褐色土（第1層）が堆積し、いずれも硬化している。

第2・3号の北端部では、第2号が基本層序第Ⅳ～Ⅲ層上面に、第3号が第Ⅱ層上面に堆積しており、中央部でも同様な堆積を確認した。第2号では、暗褐色土（第2層）がレンズ状に堆積し、その中心部は第Ⅳ層で、緩やかに立ち上がる部分は第Ⅲ層に接していた。さらに、この暗褐色土（第2層）の上面には黒褐色土が堆積しており、いずれも硬化している。また、第2号の下位から中位にかけて、2枚の降下火山灰が局所的に堆積しており、粒子の細かい黄褐色のものの下位に、やや粒子の粗い灰褐色のものとを確認し、視覚的並びに触覚的に、前者は白頭山苫小牧火山灰B－Tm、後者は十和田a火山灰To－aと思われる。

第3号は、第Ⅱ層の上面に硬化した暗褐色土（第1層）が位置している。

道路状遺構全体の層位から時期の検討を試みると、第2号道路状遺構は、降下火山灰の堆積状況から、To－aからB－Tmが降下した時期（A.D.915～923、924：1996　町田・福沢）すなわち10世紀前半、あるいは、それ以降に位置付けられる可能性が、第1号道路状遺構は、局所的にみられる火山灰の下位から検出されたことから、第2号以前に位置付けられる可能性が想定され、第3号道路状遺構は、基本層序から、第2号道路状遺構以降に位置付けられる。時期差でみると、第1号と第2号がほぼ近似し、第3

号は第1、2号より新しい時期のものと推定できる。

調査では、道路状遺構の性格を考えるうえでのひとつの判断資料として、第1号及び第2号道路状遺構を対象に、土壌硬度の測定を試みた（山中式土壌硬度計使用、第7図）。

測定の結果、高度測定で得られた数値をみてみると、第1号では、平均39kg/cm²で、その西外側が平均9kg/cm²、東外側が平均8kg/cm²を示した。第2号では、平均54kg/cm²で、西外側が平均11kg/cm²で、東外側が平均12kg/cm²を示した。いずれも、道路状の上面の数値が両外側と比較して、4倍ほど高くなっており、視覚的、触覚的にも、また、土壌硬度計を使用することによって、より正確な土壌硬化の広がりを確認した。

今回、検出した道路状遺構とほぼ平行する市道を、直接結びつけることはできないかも知れないが、この現在道は、本遺構を踏襲するものとして、また、この延長戦状に同様の道路状の痕跡が発見される可能性を想定させる存在である。今後の資料の増加に期待したい。

最後に、調査から本書刊行に至るまで、ご指導、ご協力を賜った多くの方々に、改めて、感謝の意を表します。

（担当者一同）

**引用・参考文献**

青森県教育委員会　1983　『青森県の中世城館』
〃　1989　第13集『杢沢遺跡発掘調査報告書』
〃　1995　第171集『山元(2)遺跡発掘調査報告書』
〃　1995　第172集『野尻(2)遺跡発掘調査報告書』
〃　1995　第175集『水木館遺跡発掘調査報告書』
青森市教育委員会　1991　第16集『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』
〃　1994　第23集『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃　1994　第24集『小三内遺跡発掘調査報告書』
〃　1995　第24集『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』
〃　1996　第31集『小牧野遺跡発掘調査報告書』
三　浦　圭　介　1992　「青森県における古代の土器様相」『第18回　古代城柵官衙遺跡検討会資料』古代城柵官衙遺跡検討会
伊　藤　廉　道　1994　「道路遺構の調査」『季刊　考古学』第46号　雄山閣
葛西　励・高橋　潤　1989　『小牧野遺跡発掘調査報告』
木　下　　良編　1996　『古代を考える　古代道路』吉川弘文館
町田　洋・福沢仁之　1996　「湖底堆積物からみた10世紀白頭山大噴火の発生年代」『日本第四紀学会講演要旨集　26』日本第四紀学会

# 写　真　図　版

遺跡近景（E →）

作業風景（W →）

メインセクション（C-10 ～ 12 ライン）

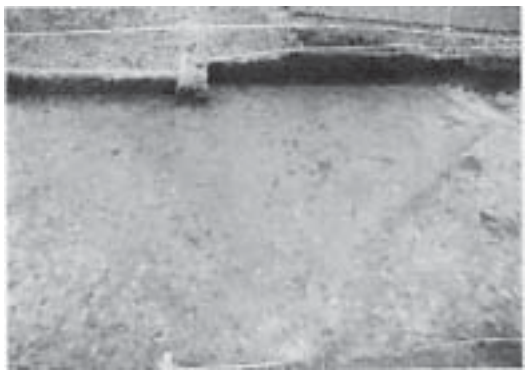
火山灰出土状況

作業風景（W →）

調査区近景（E →）

調査区全景

写真 1　調査状況・セクションほか



第 1 号竪穴式住居跡　確認状況

第 1 号竪穴式住居跡　床面検出状況

第 1 号竪穴式住居跡　完掘状況

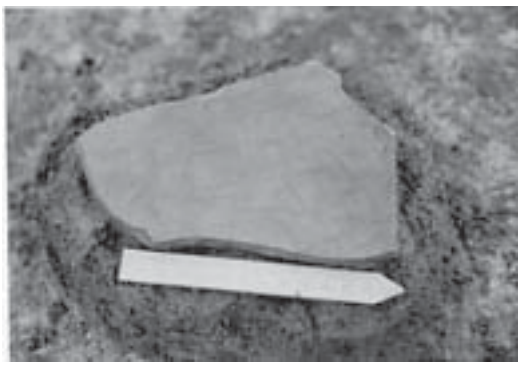
第 2 号竪穴式住居跡

第 2 号竪穴式住居跡　遺物出土状況

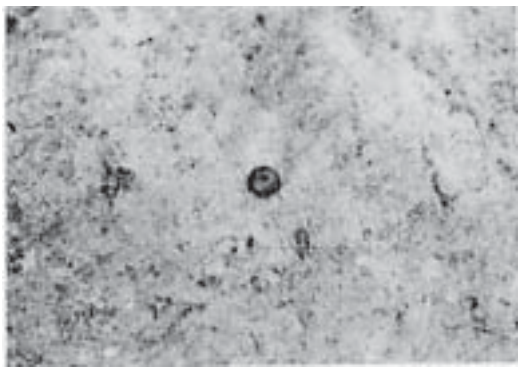
第 2 号竪穴式住居跡　完掘状況

第 2 号竪穴式住居跡　ピット（左）カマド（右）

写真 2　竪穴式住居跡

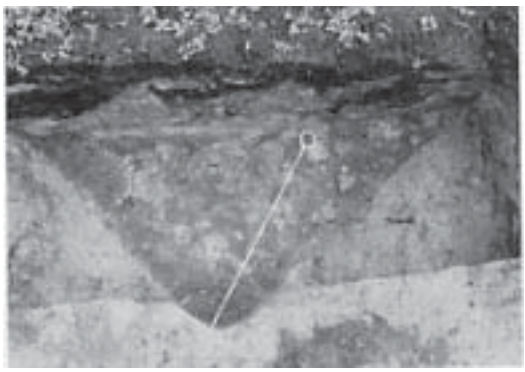


第 2 号竪穴式住居跡　遺物出土状況



第 2 号竪穴式住居跡　遺物出土状況

第 2 号竪穴式住居跡　遺物出土状況



第 3 号竪穴式住居跡　確認状況

第 3 号竪穴式住居跡　完掘状況

第 4 号竪穴式住居跡

第 1 号竪穴遺構　確認状況

第 1 号竪穴遺構　炭化材出土状況

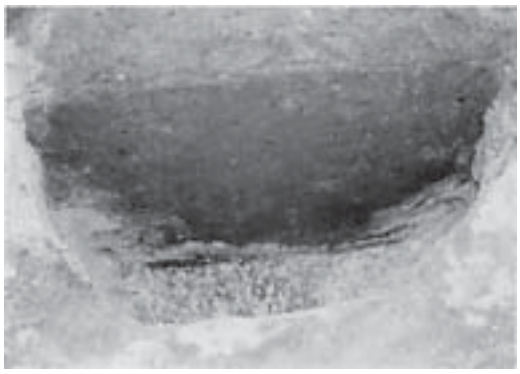
写真 3　竪穴式住居跡・竪穴遺構

第１号竪穴式遺構　炭化材出土状況

第４号竪穴式住居跡・第１号竪穴遺構セクション

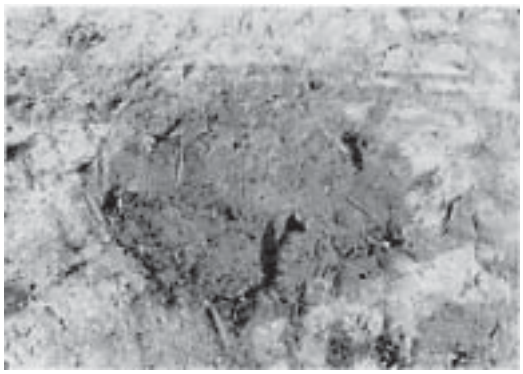
第１号竪穴遺構　完掘状況

第１号土坑　確認状況



第１号土坑　セクション

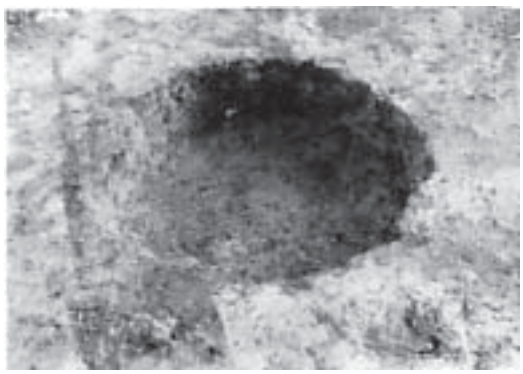
第１号土坑　完掘状況



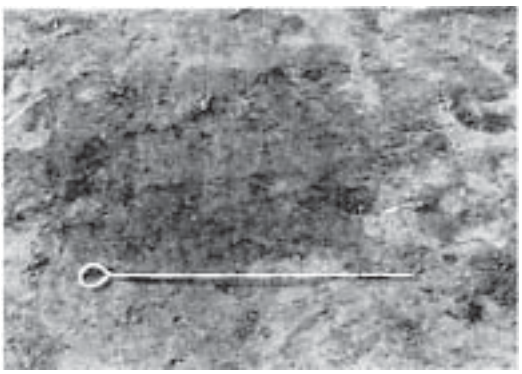
第２号土坑　確認状況

第２号土坑　セクション

写真４　竪穴遺構・土坑

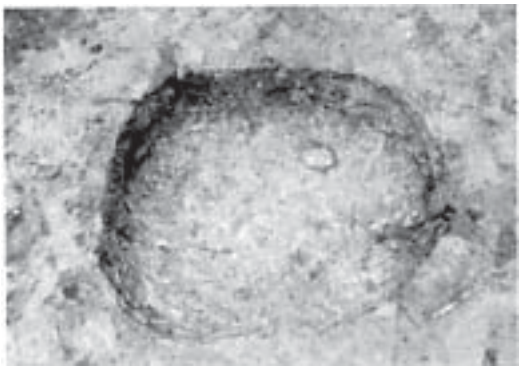


第 2 号土坑　完掘状況



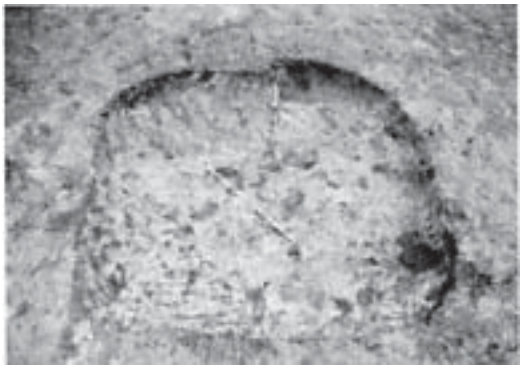
第 3 号土坑　確認状況

第 3 号土坑　セクション



第 3 号土坑　完掘状況

第 4 号土坑　セクション



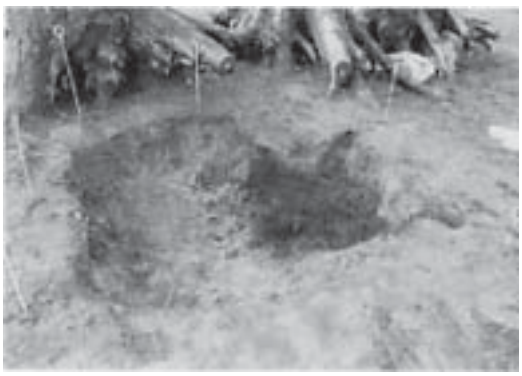
第 4 号土坑　完掘状況

第 5 号土坑　確認状況

第 5 号土坑　セクション

写真 5　土坑

第５号土坑　焼土検出状況



第５号土坑　炭化材出土状況

第５号土坑　完掘状況

第１号土道路状遺構（S→）

第１号道路状遺構　セクション

第２号道路状遺構（N→）

第２号道路状遺構　火山灰出土状況

第１号（右）第２号（左）道路状遺構（N→）

写真６　土坑・道路状遺構

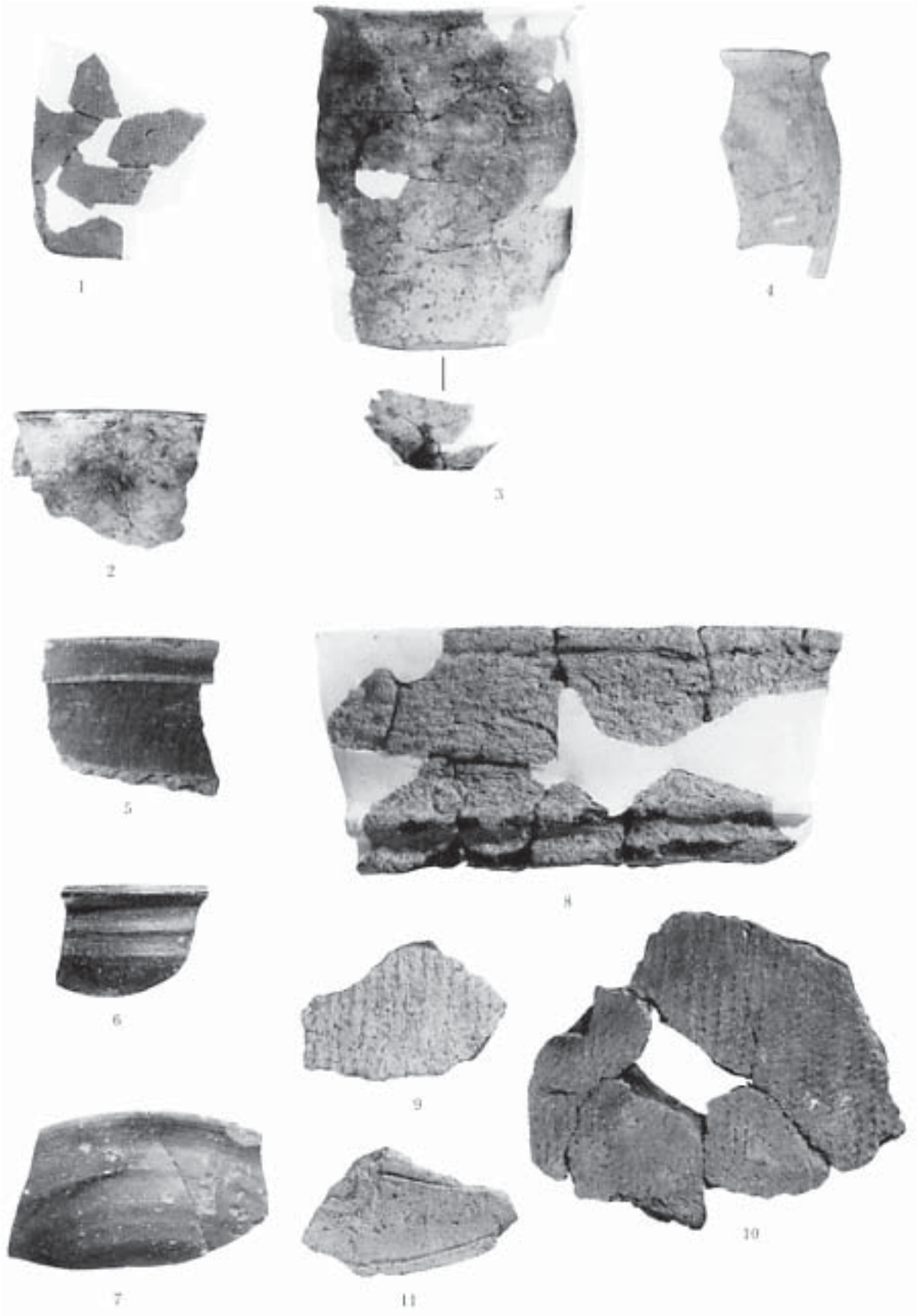



**写真７　縄文式土器、土師器、須恵器**

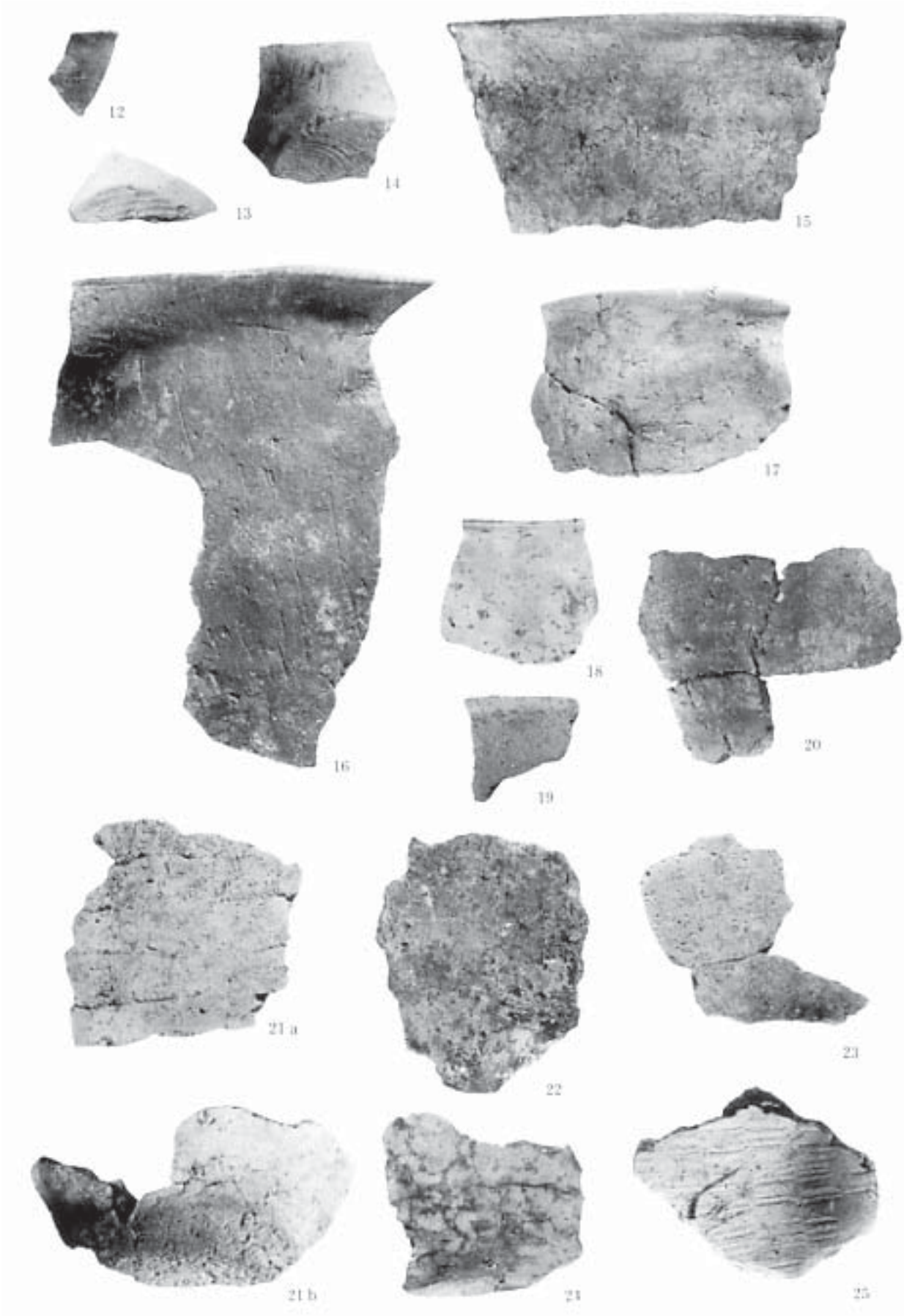



**写真8　土　師　器**

**写真9　須　恵　器**

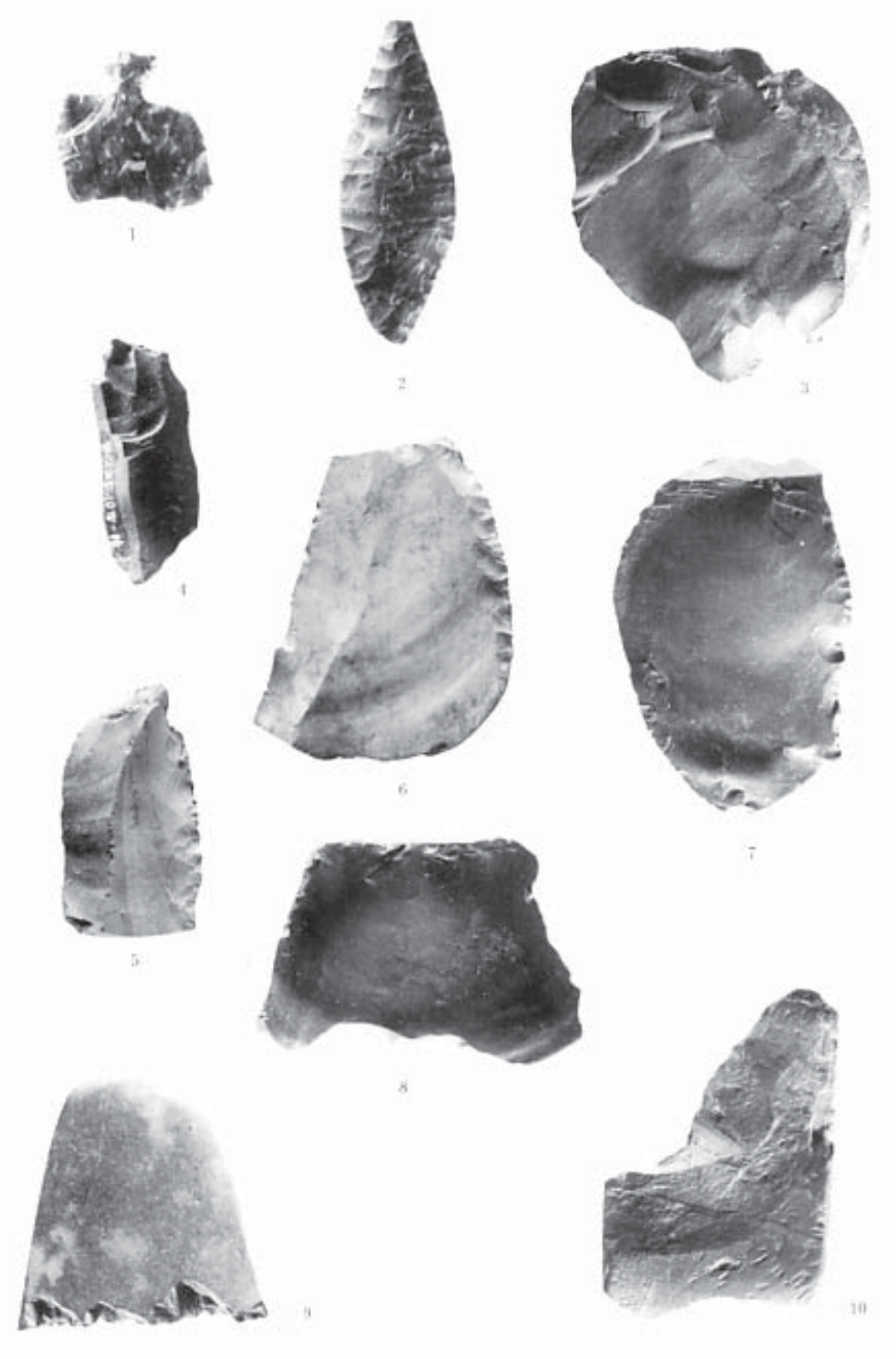



**写真10　石　器　(1)**

**写真11　石　器　(2)**

**写真 12　石器(3)、羽口、土製玉類、鉄製紡錘車**

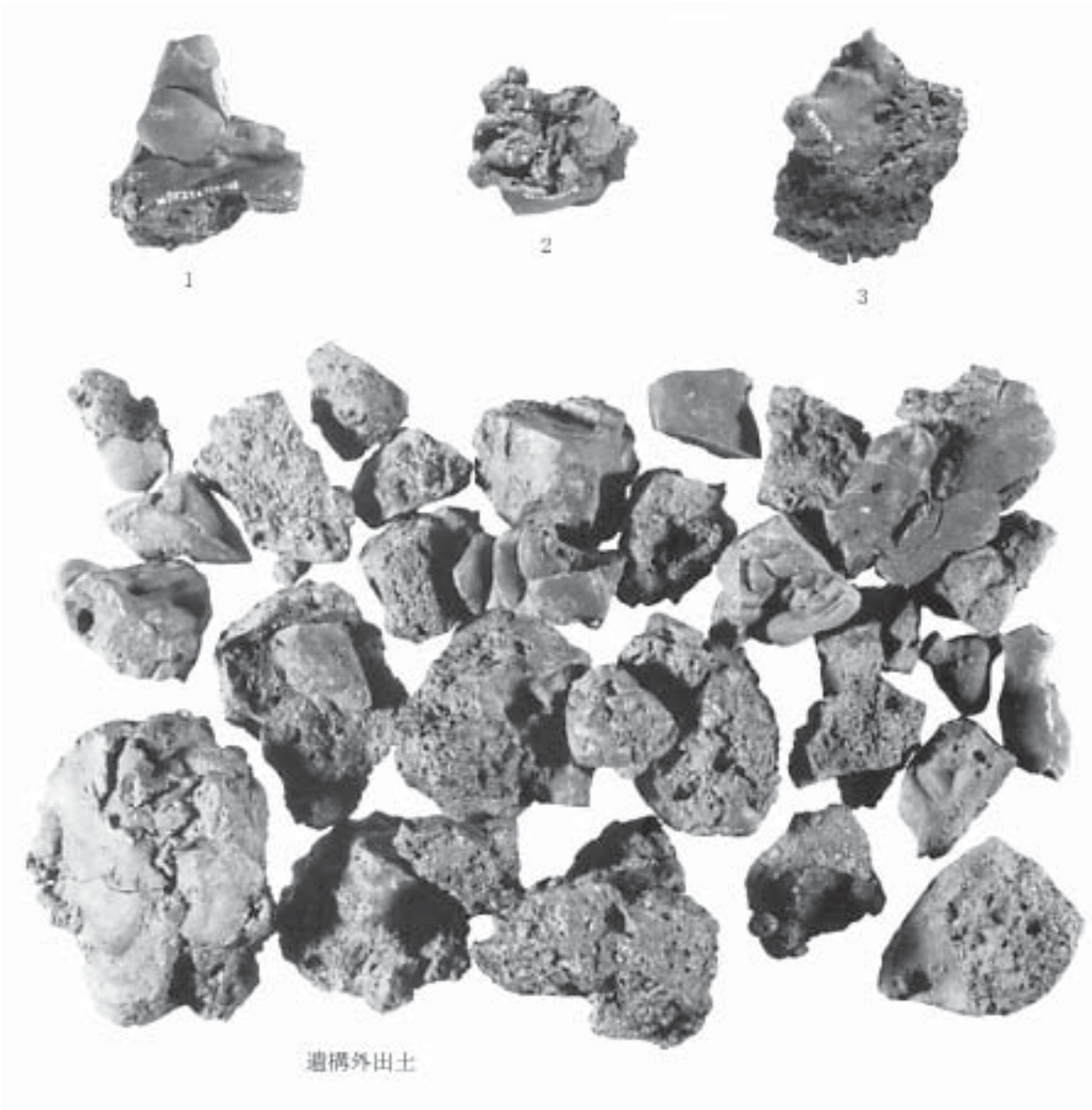



**写真 13　鉄　　滓**

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふ り が な | くずのかっこにいせきはっくつちょうさほうこくしょ |
| 書 名 | 葛 野（2）遺 跡 発 掘 調 査 報 告 書 |
| 副 書 名 | |
| 巻 次 | |
| シ リ ー ズ 名 | 青森市埋蔵文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第34集 |
| 編 著 者 名 | 田澤淳逸、児玉大成、木村淳一 |
| 編 集 機 関 | 青森市教育委員会 |
| 所 在 地 | 〒030　青森県青森市中央一丁目22－5　TEL0177－34－1111 |
| 発 行 年 月 日 | 西暦　1997年3月25日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| くずのかっこに<br>葛野（2） | あおもけんあおもりし<br>青森県青森市<br>おおべつないあざくずの<br>大別内字葛野 | 02201 | 218 | 40°<br>44′<br>58″ | 140°<br>44′<br>22″ | 19960911<br>～<br>19961111 | 2,146 | 道路建設（県営高田地区農免農道整備事業）に伴う事前調査 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主 な 遺 構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 葛野（2） | 散布地 | 縄文<br>平安 | 竪穴式住居跡4軒<br>竪穴遺構　1基<br>土坑　5軒<br>道路状遺構　3条 | 縄文式土器・石器<br>土師器・須恵器<br>羽口・土製玉類<br>鉄製紡錘車・鉄滓 | |

## 既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

| | | |
|---|---|---|
| 青森市の文化財 | 1 | 1962『三内霊園遺跡調査概報』 |
| 〃 | 2 | 1965『四ッ石遺跡調査概報』 |
| 〃 | 3 | 1967『玉清水遺跡調査概報』 |
| 〃 | 4 | 1970『三内丸山遺跡調査概報』 |
| 〃 | 5 | 1971『野木和遺跡調査報告書』 |
| 〃 | 6 | 1971『玉清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 7 | 1971『大浦遺跡調査報告書』 |
| 〃 | 8 | 1973『孫内遺跡発掘調査報告書』 |
| | | 1979『螢沢遺跡』 |
| | | 1983『四戸橋遺跡調査報告書』 |
| 青森市の埋蔵文化財 | | 1983『山野峠遺跡』 |
| 〃 | | 1985『長森遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | | 1986『田茂木野遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | | 1986『横内城遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | | 1988『三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 |
| 青森市埋蔵文化財調査報告書 | 第16集 | 1991『山吹（1）遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 第17集 | 1992『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』 |
| 〃 | 第18集 | 1993『三内丸山（2）遺跡発掘調査概報』 |
| 〃 | 第19集 | 1993『市内遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 第20集 | 1994『小牧野遺跡発掘調査概報』 |
| 〃 | 第21集 | 1994『市内遺跡詳細分布調査報告書』 |
| 〃 | 第22集 | 1994『小三内遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 第23集 | 1994『三内丸山（2）遺跡・小三内遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 第24集 | 1995『横内遺跡・横内（2）遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 第25集 | 1995『市内遺跡詳細分布調査報告書』 |
| 〃 | 第26集 | 1995『桜峯（2）遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 第27集 | 1996『桜峯（1）遺跡発掘調査概報』 |
| 〃 | 第28集 | 1996『三内丸山（2）遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 第29集 | 1996『市内遺跡詳細分布調査報告書』 |
| 〃 | 第30集 | 1996『小牧野遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 第31集 | 1997『市内遺跡詳細分布調査報告書』 |
| 〃 | 第32集 | 1997『桜峯（1）遺跡発掘調査概報Ⅱ』 |
| 〃 | 第33集 | 1997『新町野遺跡試掘調査報告書』 |
| 〃 | 第34集 | 1997『葛野（2）遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 第35集 | 1997『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 |


青森市埋蔵文化財調査報告書第34集

**葛野（2）遺跡詳細分布調査報告書**

発行年月日　平成　9年3月25日

発　　行　青森市教育委員会

〒030　青森市中央一丁目22－5

TEL　0177－34－1111

印　　刷　第一印刷株式会社

〒030　青森市石江字江渡3－1

TEL　0177－82－2333